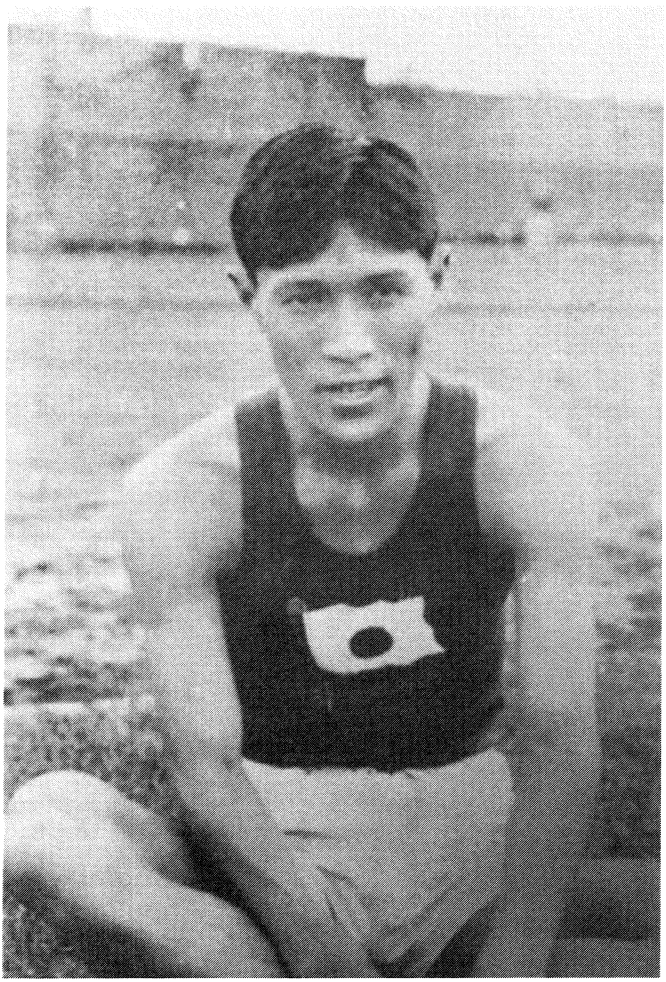


昔々の駈けっこの物語

——スプリント随筆——

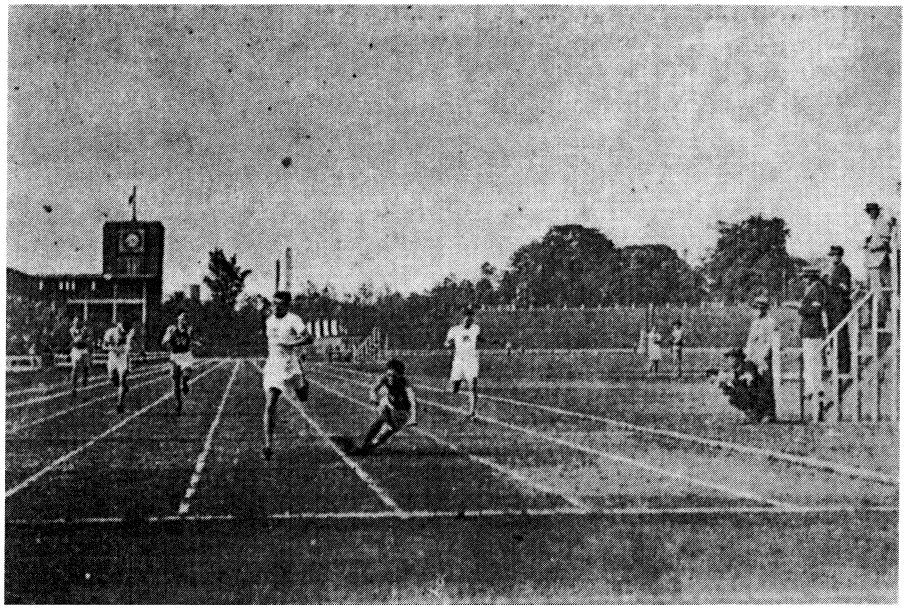
中島亥太郎



——スプリント随筆——

昔々の駈けっこの物語

中島亥太郎



スプリント走による 400m 競走誕生の瞬間！
第 6 回早慶対抗・昭和 3（1928）
6 月 9 日　神宮競技場

表紙写真・第10回早慶対抗の 400mゴール
日本新 49秒0（昭和7年10月23日　神宮）



早大対アキレス倶楽部　440ヤード競走のスタート
左端は　橋 本 信 義
（昭和３年７月10日・スタンフォード・ブリッジ）



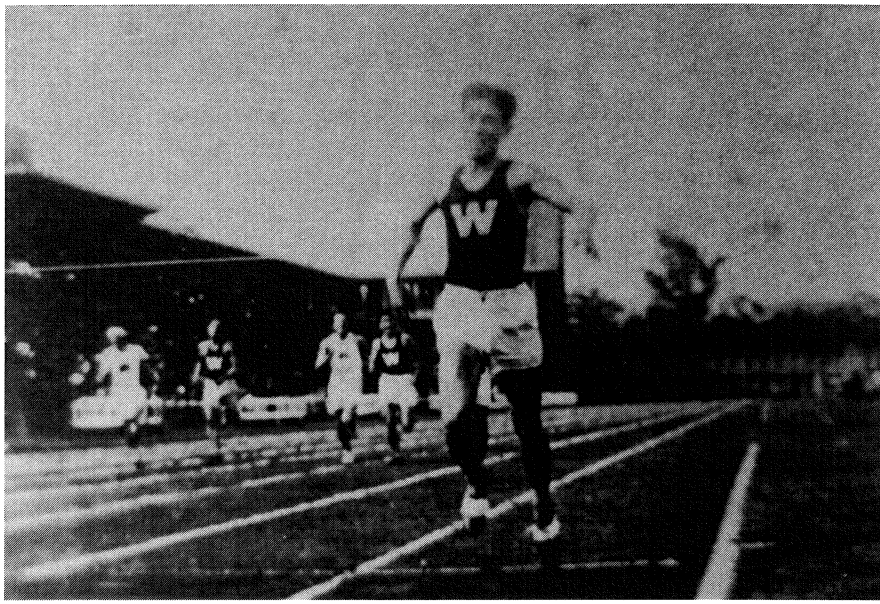
スタンドにて



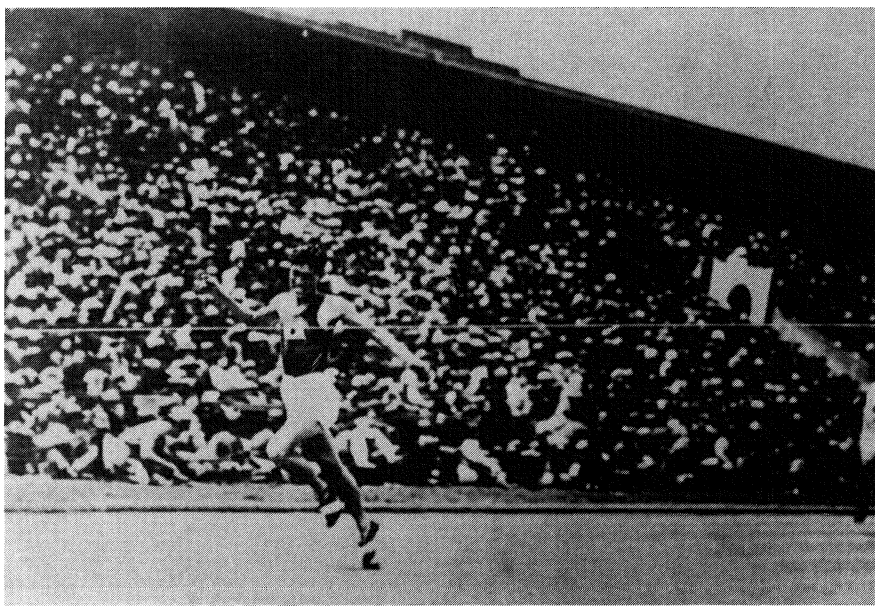
早大・アキレス倶楽部対抗戦　両チームの記念撮影



400m リレーに日本記録を記した稲門クラブ
左から 大沢重憲、織田幹雄、著者、井沼清七
（昭和4年・第16回日本選手権・神宮）



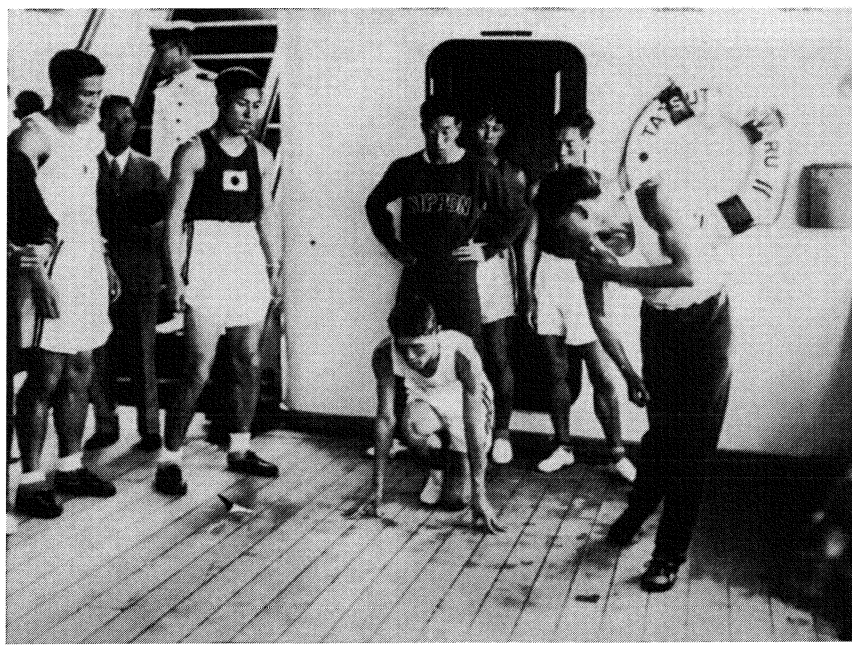
第８回早慶対抗 400m ゴール
（昭和５年５月３日 神宮）



第９回極東大会 400m ゴール
（昭和５年５月 24 日～27 日 神宮）



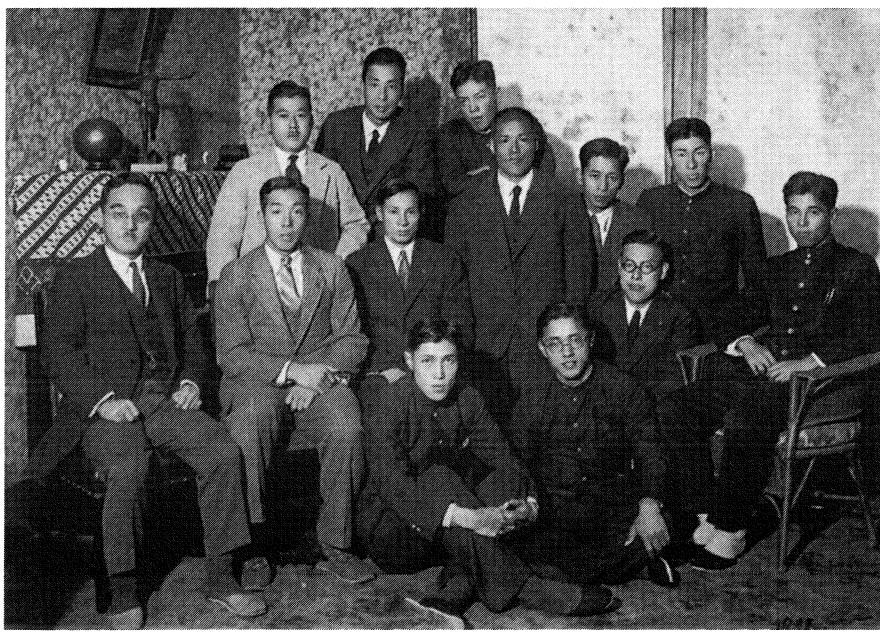
第11回早慶対抗400mゴール前
（昭和8年5月6日 神宮）



織田氏のコーチでスタート練習する著者
（昭和 7年 ロス・五輪へ向う龍田丸船上）



ロサンゼルス・オリンピック 日本代表・早大選手団
（昭和７年 龍田丸船上）
左より 南部忠平、木村一夫、沖田芳夫、張　星賢、著者
織田幹雄、西田修平、馬場　譲(OB)、住吉耕作



早大競走部長・山本忠興先生邸にて

目次

やせの悲しみ　1
悪がき時代　6
小便の話　16
ある大騒ぎを仕出かした話　1
県立沼津商業へ補欠入学した話　5
水洗便所の話　11
言葉―カタコトの外語の経験　18
西田修平さんと　21
続・西田修平さんと　24
若気の至り　30
何故か、私は決心した　35
練習方法雑記　41

母に詫びる　56
六十年目の卒業証書　69
大阪独身赴任と大原美術館　72

四百米競走　83
―日本陸聯編・昭和9年　中島　亥太郎

競技記録とレース　115

編集後記　136

やせ の悲しみ――

一、木綿針
一、はりがね虫
一、にんじん
一、カマキリ
一、猿（サル）
一、ブリたん（ブリキの湯たんぽ・ブリキ製で表面に約２０センチ位の溝が横に並んでいて、私の胸の肋骨に似ている）

右に列べた変なものや、生き物によって、何が物語られているか解るか？

うん、兎に角痩せ細った人間を考えてくれゝばいい。と言ったって生半可なものじゃない。言っては悪いが、ＴＶなぞでよく見るアフリカの或る国の、食物に見放された多くの大人、子供の哀れな姿、表情も稀薄な……表情も普通で、何の不自由もないけれど、このアフリカの不幸な人々と全く共通している体型が、私である。

冒頭に並べたのは、その私の時代時代の「あだ名」である。これで、どんなにヤセこけている私であるか想像出来るであろう。

若し日本の映画でアフリカのシーンを撮るようなことがあり、ほんとに痩せたアフリカの人が必要なら、私は充分にエキストラとして使えるという自信がある。それに多少、演技も出来る（？）と思っているから、脇役くらいなら立派に演れる。

大島渚さんよ、如何ですか？私を使って、カンヌの映画祭で「グランプリ」を取って下さいよ。敢えて大島監督を出したのは、私の住家が海のある監督と同じ処だからで、うちのワイフが時々監督のジョギング姿を、わが家の前の道で見掛けるからだ。

監督と云えばもう一人、篠田正浩は私の大学の競走部の後輩で、死んだ中村清にしごかれた口だ。（中村も少し後輩で、一緒に練習したもんだ）私は曲りなりにも日本一の選手であったから、篠田君なぞ、私の前では大きな面（ツラ）は出来ない筈だ。尤も不幸にして面接する機会をまだ持たないが。

河野洋平も同じだ。但しこれも、競走部の先、後輩として。

話をもとに戻すと、私はやせ細りで、体重もなく、脚が長くて、一米七〇・五十二瓩が私の学生時代スポーツの最高潮の時。走っていてアゲィンストのゴール前の風は一番怖いものだった。もっと目方が欲しいとつくづく感じた。

ゴルフをやった。

会社で営業の責任者の時、必要に迫られて始めたが、気違いのように虜になって、週に三回もプレーした。それも会社を休んだのではない、半日お客様を誘い、又誘われて、社用族でやった。忽ちハンデは上がった。それは何年も前のことで、ゴルフをやる人種は或る程度の特定人種だった。道路も空いていて、車で近郊のゴルフ場へ行き、半日充分ワンラウンド出来た。全く私はゴルフ好き、車のトランクには武士の二本刀の如く、いつも道具が収まっていた。そして、自宅から一時間で会社へ通った。

正に良き時代であった。会社でマイカーを持ったのは私が第一番、中古車ではあったが、自分の金で手に入れたもの、社長のは会社の車、私は心の中で俺の方が上位だと思っていた。

時々社長に「君はよくゴルフをやるそうだネ。でも仕事も良くやるネ」と、ほめられたのか、小言を云われたのか分からないようなことを言われた。たゞ私は社長にはほんとに可愛がられた幸せ者であった。

ゴルフ好きな人なら判るが、十九番での湯上りのビールは堪らないものだそうだ。残念ながら私はアルコール類は一切駄目。

それ故私はプレーの後、湯には入らない。ほんと言えば、湯に入ってひと汗流

したいのだが、裸になると、この体は人前に出せなかったからだ。

悲しいこの心境を、誰が考えてくれるもんか。

ゴルフの話、ついでにも少し書いておこう。

土曜日の夜にはワクワクして、明日のプレイを考えて嬉しくて……。しかし、ふと心の隅に、「ゴルフ・ウイドウ」を浮べた。そこで心にもなく、引け目を感じて或る時、「君も少しやったら……」と、女房に向って口を滑らせたもんだ。勿論、女房はやるまいと思っていたし、又、やらせる気なぞ、それこそ全くなかった。

それがどうだろう、やり始めたのだ。近くの練習場へ通い、面白いわ、私の性に合ってるとなり、遂には私のゴルフ場にヴィジターで一緒に出掛ける有様。これでは金が掛って仕方ないと、私は十万円で正会員になっていたが、女房はまけてもらって、たしか十五万円位で正会員にした。女房の熱中は続き、遂には婦人部の委員に迄なった時期があった。近頃は女の方がプレイするのが大流行とか。女房はそれを先取りしたのだろうか、天晴れと褒めるほどの話ではないが……。

その後私は、交通事故に会い骨折までしてしまい、老年をも考えて、ゴルフを止めざるを得なくなり、会員権を売って、税金を高く取られた。

女房には、私が死んだら、慎ましくゴルフでもやれよと云って、プレイを勧め

るが、私に遠慮してか、殆ど行かない。

と言うわけで、私の細い体の様子を書いてみるのが目的だったのが、種々横道に逸れてしまった。如何、この駄文の結末を付けようか困っている――。

私はお洒落で、ＴＰＯで服装をキめる。

老人の爺臭いのは嫌いだから、自分が爺ィなのも忘れてお洒落する。

カジュアルには、それに合わせ、今は斯くてジーンズに、上は黒の太い横縞のシャツを着ている。まるっきり西部劇のスティブ・マックインを真似て。

音痴の私は、細くなろうとしてダイエット方法を間違えて死んだカーペンターが迚も好きで、彼女の「イエスタデー・ワンスモア」を聴くと、涙が出る。それ程、惚れていた彼女は痩せたくて死んだ。私は銭湯にも行けない身体。何と皮肉なものだ。

結局は、創造主の御心のまゝに生きることが大切で、親に貰った体を有難く感謝したい。整形外科なんて以ての外。

おたいくつさま（９０・５・１７）

悪がき時代

明治生れの、大正時代の小学生の私――

家から二粁ぐらいの処に学校があった。広い運動場を囲むようにして右側に二階建の木造校舎が幾棟か、きちんと並んでいた。校門から向って左側は樹の沢山生えた小高い岡になっていて―丁度現代のスタンド席のようなもので―その中腹に「御真影（天皇様の御写真）」奉安殿の小さな建物があって、コンクリートの階段が下まで作られていた。

一年生に入学した私は三月生れの早生まれで、後で段々判ったが、半年、一年近い遅い誕生は、頭脳の働きに大きな差があったことを思い出す。

一人っ子の私は甘えん坊で、小さくて痩せていてひ弱く、病弱児であった。

祖父の徳太郎が十日余りも毎日付いていなければ、私はとても学校に行く気にはなれなかった。祖父は教室の後方に立って、吸いたくてたまらない煙草を我慢して孫を見守ってくれていた。私は時間の半分は後ろを振り返って祖父の居るのを確かめ安心し、先生の言うことは殆ど聞いていなかったようだった。

受持の先生は「中村先生」別名に「亀さん」と云うあだ名がついている、老い

た、やさしい先生で、「もしもし亀よ」「来たれや友よ」なぞ童謡や唱歌を歌って踊って、ほんとに良い先生だった。

二年になると、「金子まん」と言う若い女の先生が、紺の袴で優しく教えてくれた。私は母以外の女の人に接する機会が殆どなかったので、金子先生が姉さんであったらと、心の中で考えた。若しかしたら私の初恋であったかもしれない。ただ、今の私にはこの先生に就いて、細かい記憶が残ってないのは残念だ。

三年生になった。

私の悪い想い出の三年生。小さな悪戯盛りの少年の私に、鋭い刃で心を突き刺すようなことをして呉れた担任の「小野先生」、姓だけで名は忘れたが。私はこの先生の誤った教育は、現代ならさしづめ登校拒否の因をつくる先生であろうと考える。「中年のばばあ」

私は憎まれた。ほんとうに毎日々々憎まれていると感じ続けた一年間であった。私が悪かったところも多々あつたことも事実であったろう、しかし数え年でも十才に満たない子供に対して苛酷な……！

小春日和の良い天気の休み時間に、校舎の外側の羽目板にピタリ背中を押し付けて、黙って皆の遊ぶのを見ていた私、どこも怪我していないのに、私の心の方はズタズタに引き裂かれていた。「何故？」

「いたずらもの」とボール紙に書かれたのを、背中に背負っていたのだ。

休み時間は絶対に外へ出なければならない。同級生だけではなく、全校生徒に私の罪を公開して笑いものにし、見せしめにしてやろうという中年ばばあの悪意だった。不貞腐れていられる年頃である筈もない私は、皆に見られるのが恥かしくてたまらず、辺りの風景は真っ白、心は真っ暗、必至に羽目板に背中をくっつけていた。

こんなことが一年間に何回あったか、その数も忘れてしまったが、ボール紙も度重なると、恥ずかしさも、口惜しさも、情けなくも色薄れて来たが、先生に対する反抗心だけは募るばかりであった。

反面、小野先生は自分のお気に入りの子には、大きな毛糸の花を胸に着けてやっていた。鋸缶屋の遠藤光君はいつもその花を胸に着けていたのを覚えている。だから今でも、偉い先生方が演壇に立つたり、種々なイベントでお偉方がテープカットをする時は決まって胸に立派な花を着けている、私はその度毎に「馬鹿野郎」と軽蔑を感じる。

私にもスポーツの関係で幾度か花を着けられる機会があったが、受付の娘さんが着けるのを断って、手で受取り、ポイッと屑物入れに捨てている。

胸に毛糸の花の遠藤君は、小学校を卒えると橋本栄助君等と共に、県立沼津商業に、立派に入学出来たが、私は失敗した。

国語、数学は満点。作文がいけなかった。

余りにリアリスチックに真実を書いたのを、先生達は「ばか者」ばかりで、概念的な味も素っけもない在来の作文作法から外れているとして私を落第させた。が、気の毒に思ったのか、三日後に補欠入学の通知が届いた。

父に連れられ入学手続を済ませ、その帰途、狩野川大橋の側の有名なウナギ屋の二階で、初めて蒲焼きを食った。私は大体、魚が嫌いだったが、この時の味は忘れられない。

現在は、川岸でなく、ちょっと離れているが、立派なお店になっている。私は家族を連れてドライブで行った時、そこで昔変らぬ味を楽しんだ。女将がわざわざ挨拶に来て、昔話に花が咲いた。

沼商に戻るが、一年生から二年生に進級する時、三十幾人も落第者が出たが、私は幸いにも二年になることが出来た。今は既に他界されたが、小野先生に花を着けてもらった遠藤君と橋本君も進級出来なくて、一年をもう一度やった。

私は遠藤君たちの落第を気の毒に思ったが、憎い小野先生に対しては、「態を見ろ！」と呟いた覚えがある。

ついでのことに、私の沼商時代一緒に運動部に居た植松重次郎君も、補欠十三番のビリで入ったのだと話して呉れた。彼は現在、かの有名な「ライオン油脂」の副社長となり、それを退いて相談役となっている。高等商船の機関科から海軍に入り、敗戦後、ライオンに入社して、何か洗濯機の主要な発明をしたとか、それで出世した。人間なんてわかんないもんだ。

私も大学にやらせてもらったが、私はスポーツをやりに入学し、学問は駄目だったが、日本一のランナーになったこと、親の有難さ、友情、なぞなぞ心の糧を得られたことは、神に感謝しなければならない。アーメン。

これで、私の少年時代の項を終る。

小便の話

私の生れた処は、あの美しい富士山の麓の御殿場市だ。

現在は戦後の発展で現代都市の形態をとっているが、私が生れたのは明治の終りであるから、御殿場は貧しい小さな田舎町に過ぎなかった。その私も老い耄碌してしまい、今問題にされている高齢化社会の一員である……呵々。

少年時代、電灯工事が始められ、初めて電灯が灯った時には、驚きと嬉しさで感激した。それ迄は、夜の照明は勿論ランプ、夕方になると淡く灯がともり、小学校入学前には始終、灯油を買いにやらされた。又ランプのホヤと称するガラスをボロ切れで掃除するのが私の、決められた仕事の一つであった。だから電気工事が始まった時は、その工事現場で飽かず眺め続けているのが、迚も楽しいことだった。

家の建っている敷地内の奥の方に、「物置」と呼んでいた一軒の、人がどうにか住める程度の小さな家があった。

そのすぐ傍に竹薮があって、筍を掘って食べた旨さは忘れられない。そして、お祖母さんが作って呉れていたイチゴの、まだ少し青い処があるのにもいで、洗いもしないで食べるのが又楽しみだった。その頃に、偶にお祖母さんが一銭銅貨をお小遣いに呉れたことを覚えている。

さて問題の物置小屋は、私が何かわるさをした時入れられるお仕置き用の牢屋だった。「カンニンして……もうしないから」と泣き叫ぶ私を父母が二人がかりで、力づくでその物置の真っ暗な中へ入れてしまい、鍵をかけてしまう、度々のことであった。

ある年の瀬、何で怒られたか判らないが、泣きの一手もむなしく、ガラガラ、ポン……無理矢理、物置に入れられた。

初めは例の如く泣き喚きながら、「開けて呉れ！」と叫んでいたが、無情にも重い板戸が、「グウヅ、グウ」と音を出して締められて、外から「ガチャン」と錠の音がして、両親の足音が遠ざかった。辺りがシーンとなり、心細くて私は、一層大声上げて泣きに泣いた。

泣きじゃくって声も出なくなった頃、暗かった物置の中も、どこからか洩れる光に眼が慣らされて、少しづつ周りが薄ぼんやりと見えて来た。

古い畳に油紙が敷かれ、その上に正月用の餅が小さく四角に切って並べてあった。

私は段々諦めの気持になると、閉じ込められた怖さにも慣れて来て、気持も落着いて来た。

私は小さな復讐を考えた。直ぐ実行に移った。

勇気をもって、その正月用の餅の上に小便を上手に、平均的に引っかけた。とても嬉しくなって一人笑いをしたもんだ。

やがて正月が来た——

「この子はどうして餅を食わないんでしょう、急に嫌いになるなんて……」

母が父に云っていた。

側で私は、

「今年は食いたくないんだ」と、云った。

幾年か過ぎて学生になって、ある正月に帰省していた時、私は餅を沢山食べた。

とても旨かった。

母はいつも「餅は精がつくよ」と云つていた。この時も、同じ言葉を繰り返して、私がよく食べるのを見て満足そうだった。

「昔、私が小さい時の正月に餅を食わなかったことがあったろう、覚えているかい？」と、訊ねた。

「そんなこともあったね。強情で、利かん坊で……」

「ハハハ……素直な良い子だったんだがなぁ」

「さんざ世話焼かしといてハハハ……」

「白状しちゃうけど、あの餅はね……」

私は「小便」の話を披露した。皆大笑いだった。

「良い子もないもんだ、お前ったら……」

母は、そう云いながら又吹きだし笑いになってしまった。

餅は現在でも大好物だ。夏でもスーパーで売っているので食べることがあるが、餅も季節の物なのだろうか、冬の寒い頃の方が旨いと感じている。

ある大騒ぎを仕出来した話

其の頃、家の西隣りの薬屋さんとの境に小さな川が流れていた。毎朝、その川へ顔を洗いに行った。

その川へ出る我が家の一角に、誰にも気付かれない小さな隠れ場所があった。

例によって、何で叱られたか忘れたが、「お前のような者は内に置かない、出て行け！」と、ひどく怒られた、多分可成の悪さをしたに違いないが、もう相当な悪餓鬼になっていたことは確かだった。

私は「出て行くよ」と反抗して、その隠れ場所に姿を消した。其処で私は、立川文庫の「宮本武蔵」に読み耽り、強い剣術つかいが居るもんだと感心していた。勿論、吉川先生の「宮本武蔵」が世に出るずっと前のこと。

どの位時間が過ぎたか分からないが、兎も角夕方になったのは事実であった。その秘密の隠れ場所からは家の中の様子や話し声は筒抜けで、

「あいつ、もう帰って来る頃だろう、腹が減ってちゃ戦は出来ねえハハハ…」と父の声。

「でも、何処へ行ったのかしら……」と、母。
心配している様子が、その声から私にはよく分かった。
私は心の中で「出ていってやるもんか」と、呟いていた。
辺りが暗くなり、家の中では祖父母、両親が私の為に口喧嘩を始めた。先ず祖父が両親に向かって、「お前らがくだらなく叱るからだ、あの児は強情張りだから、何処かへ行ってしまったのだろう」
そのうち話が大きくなって、近所の人々に頼んで提灯を持って私を探すことにまでなってしまった。
私は「此処に居るよ」と出て行くチャンスを失い、出るに出られず、自分でもどうしてよいか分からなくなり、大いに困ってしまった。
隣近所の人達が、或る者は「誰も見かけなかったらしい……」とか、「あの児は汽車が好きで、よく見に行っていたから、俺は線路の方を見てくるよ」など、ガヤガヤ言って、一里もある遠くへ足早に出掛けて行った。
幾時間か経って、私は腹が空いてたまらなくなった。勇気を振って、泣きべそをかきながら「只今」と皆の前に出ていった。
いきなりビンタを喰った。
それは、母の手だった。

「まあまあ、無事で帰って来たんだから……」と、祖母が取りなして小言も言われず私は飯を食った。

母は人達の手前もあって、私を殴ったのだと私には分かった。

母は私をこよなく愛した。自分が肺病で死ぬ間際迄、私を愛して呉れた。

「日本が負けても、無事に帰れるのを願って」夜中にお百度参りをした。それは私が陸軍の兵として戦場で戦っていた頃の話である。

母はほんとうに母としての自我を出し切って、私を愛し続けた。その母にだけは現在でも言い切れぬ感謝と、親不孝をつくづく感じている。

お墓にお参りの時は、若くして死んだ私の妻よりも先に、母に祈りを捧げる。

これで私の悪騒動の一つはとじる。

県立沼津商業へ入学

私は補欠入学だった。

入学試験は算数、国語と作文であった。私は入試合格に絶対の自信を持っていたのに、発表には私の名は無かった。つまり、すべってしまったのだ。仕方なくもう一つの三島の商業学校へ入学することに決めた。これは万一の時のすべり止めだった。

しかし私には、どうして沼商に失敗したのか納得がいかない。数学は全部出来たし、国語も九十点は取れていた筈だ、それに作文だって、私の真実を詳しく書いた積りだ。

私は思い出す度あの作文は、試験を採点した先生方の一方的な認識不足が低い得点にしてしまったのだと、現在に至る迄そう信じている。

作文の題は「私の好きなもの」というのだった。

私は饅頭が一番好きであったので、饅頭について細かい表現で書いた。例えば祖父が知人の葬式に出て貰って来る饅頭は、焼くとき杉の葉を皮の上にのせるの

で、大きな小判形の饅頭の表面の焦げ茶色に杉の葉の形が白く浮き出していた。葬式には必ず出るそのアンコたっぷりのアンコの部分から食い、甘さに堪能してから皮の部分に取り掛かり、皮にくっついているアンコがまた別の旨さで、あゝよく食ったと嬉しくなる、その葬式饅頭の私の食べ方を細かく書いたのである。

それは幼い私の真実の告白であった。あんな素晴らしい習俗と少年の味覚の成立とを認めることの出来なかった諸先生を私は、今でも軽蔑している。私は今流のエッセイとして立派なもんだと信じている。見解の相違と云えばそれ迄だが、先生方はきっと幼稚な内容だと決めつけ、紋切り型の味も素っ気もない文章を良しとしたのだろう。

兎も角、補欠の通知を受けて、三日ばかり遅れて入学の手続をした。父が狩野川の畔の鰻屋で食べさせて呉れた、あの旨さは忘れられない。

補欠入学だから、一年生全体のビリの成績であったに違いない。

その一年間は自分なりに勉強して二年生に進級出来た。一年生をもう一度やらされた者が三十名も居たのを覚えている。

卒業後、植松君と云う親友も補欠の十三番で入ったと聞いて、私は驚いた。彼は当時の高等商船に入り、その機関科を出て、戦争で大尉さんになり、終戦后、

現在の「ライオン油脂」の副社長さんになった，

私は私学の大学に入り、ランニング選手となり、日本記録を幾つも作ったが、社会へ出ては、自我が強いので会社では出世出来なかった。

あの作文からのせいか、沼商を卒業しても何の愛着も感じないので、幾十年過ぎた今に至る迄、母校（？）を訪ねたこともない。死ぬ迄にも恐らく行く機会は無いだろう。

「補欠入学もいゝもんだ」

水洗便所の話

またも小便に関係ある話である。

昭和二年の秋に東京の千駄ヶ谷にある明治神宮競技場―現代の国立競技場―で全国中等学校陸上競技選手権大会、現在の所謂インターハイが開催された。

私はそれに参加することになって、同じ御殿場の出身で沼津中学に入学して、県下ではナンバー・ワンの百米の選手であった森下君と二人で上京した。彼は高等科から中学に入ったので、私より幾つか年長であった。

宿泊所は競技場のすぐ傍の日本青年館だった。現在の物ではなくて旧式で、しかし当時としては大きな、確か五階建くらいだったろう。その四階の畳の部屋に泊まることになった。建物の造りは極めて旧式、エレベーターもないし、第一番に不便なのは各室どころか、各階に便所が無いことで、用のある時は階段を下りて一階から更に降りると、地下室に廣い便所があって、ドアーがずらり並んでいた。

そんな、現在では考えられない建物でも、私にとっては洋式のビルは初めてで、

とても素晴らしく感ぜられた。満十六才の私だったので生意気にも、田舎っぺいに見られはしないかと気になり、何んとなく周囲から見下されている様な気がしていた。

或る日、用便に地下室へ行き、一個の便器にしゃがんだ。暫くして用を済ました迄は順調だったが、最後に横の鉄の棒を引いた。途端に後ろから洪水の如く水がドッと流れ出て汚物を押し流した。こんなことは今では当たり前で馬鹿なことみたいであるが、当時の私には大変な出来事であったのだ。吃驚して跳び退いた。私は仰天して、水を止めようとして横手の棒を左右、上下に動かした。「止まらない」私は困り狼狽して、とうとう一散に逃げ出して、四階の部屋へ駈け上り、畳に仰向けに寝て、天井を見詰めながら、あの止まらない水はどうなっているだろうか、地下の便所中に溢れてしまったのではないかしら、と想像すると、怖くなって……さりとて、どうにも手の打ちようがない。友人に聞くことは私の犯罪を告白するようで、とても出来ない……。

数分後、私はジッと部屋に居ることも出来なくなり、犯人が現場へ立ち戻る心理と同じで、ソッと便所の様子を見に行った。ところが驚いたことに、いや、不思議なことに、便所は静まりかえっていて、床もまったく濡れてれていない。今思えば、たわいない事柄であるが、当時の私にとっては大変な事件であった。その後、

私は田舎者丸出しで、事務所の男の人に便所の仕組みを聞いた。直ぐ分かったが恥かしかった。

競技は二百米を走り、一次予選、準決勝を勝って決勝にゆき、三着に入賞した。一着は今は故人になったが、彼の有名な「暁の超特急」の吉岡隆徳さんで島根師範、二着は慶応へ入った西巌君で、ともに大学時代ライバルとなった面々であった。

私が曲がりなりに、お洒落をするようになる迄には、水洗便所事件のような難関を幾つも潜り抜けなければならなかった。

あゝ「水洗便所」よ——。

言葉――カタコトの外語の経験

戦争前の昭和の初期に、私は満十七才三ヶ月と記されたパスポートをもらって英国に渡った。

私は昭和三年四月、憧れのワセダに入学（入れてもらった）し、競走部員になり、彼の世界の織田幹雄先生に指導を受けた。

その入学早々ニヶ月も経たない若僧に向かって、六月九日の早慶戦の４００ｍを走れ！と、織田さんは命令した。２００ｍまでは走ったが４００ｍに出ろと云われて私は吃驚仰天、しかも当時天下分け目の早慶陸上、寡黙な織田さんは走れと云うばかり。私は今迄やったことのない種目に出される破目になってしまった。ほんとに陸上の神様は不思議なことを思い付かれるものだ。

４００ｍは、其の頃日本一の慶応義塾・岡田英夫選手の優勝は決定的だった。新聞の予想も陸上ファンの方々の下馬評も岡田選手二重丸であった。

私自身は、予想も相手選手もへったくれも何も知らず、ペースなんて洒落たものも駆け引きなんて一切五里霧中、知ってることはスタートに着くことゝ、ピストルが鳴ったら短距離競走を遮二無二突っ走るだけ、気息奄々ゴールに倒れ込んで、岡田選手の追い込みを交し間違って優勝してしまった。

勝った喜びなぞ何の感激もなかった。ただ当時のトラックの砂の上に倒れ込んだ為、腕から脚までスリ傷だらけになり、控室へ皆に担ぎ込まれ、白い包帯をグルグル巻かれた。

その包帯を巻いて下さったのが織田先輩であることを知った時、こんな偉い人に手当をして貰うなんてと、有難過ぎて涙が出た。これは勝った喜び以上の感激であった。

それから何十年、私も老人になったが、陸上界に出て日本記録を何度も作れたのも皆、この先輩の御蔭だとつくづく感じる。現在時々小さな古い我が家に御夫妻をお招きし、昼食を食べて頂いているが、気楽に来てくださるお気持、私は嬉しくてたまらない。

そして、４００ｍに勝った私は、英国遠征に加えられてしまった。

それが又、性急であった。

授業中の教室にヌッと姿を現わしたのが沖田主将であった。助教授に何か断わりを云うと、大声で「中島は居るか……亥太郎は居ないのか？」

「居ます」私は返事した。

「急用だ、来い！」

沖田さんは廊下へ私を連れ出すと、ムスッとした顔のままいきなり、

「戸籍謄本を貰って来い」

「えっ……？」

「英国へ行くんだ」

「だ、誰が行くんです……」

「お前も行くことになったんだ」

ワセダの英国遠征なんて初耳だったので、私はオタオタしてしまって、

「駄目です、僕なんか……」

「戸籍謄本が要るんだ、取って来い！」

命令されて私は、郷里の御殿場町（当時は市でなく）役場で貰ってきた。余談だが、今は故人となられた社会党の委員長だった勝間田清一さんは私より三年上で、その頃大学へ行っているものは外には三人位であった。

シベリア鉄道だけでも一週間、東京からロンドンに着く迄、二週間以上掛ったのではないか――。

先ず、この項のタイトルに従いロシア語を――

革命後間もない頃で物がなく、停車する駅のホームにはロシア人が屯していて、私のタバコ一本でタマゴが二つ位と物々交換した。

シベリア鉄道に乗った瞬間、カメラは預けさせられ、トンネルの近くになると、窓は全部締められ、ソッと覗くと、銃を持った兵隊がトンネルの入口に立っていて、ウッカリ覗くと撃たれるぞと脅かされる状況だった。

その一週間の間に覚えたロシア語の片言を並べると、

スバシイボー　有難う

ダアーイエス・カカエート・イタンチァー　何て駅ですか

スコリコー　幾らですか

ハラシヨーグッド・ドシヴイダニアー　さようなら（これは自信がない）

その他、単語を幾つか覚えて、これで結構、手真似を交えて心が通じ合い曲りなりに用が足りた。

フインランド、此処は駄目、全く駄目、英語、独語、何も彼も駄目。

と云うと、私が英語、独語が出来るようだが、ブロークンで、ただ心臓が強いから英語で相手構わず喋り捲った。

卒業して会社に入り、英語が絶対に必要な課に配属され、苦労して、それこそほんとに苦労して売った、買ったを英語でやらねばならなくて、真実苦しみ、何度か「ベッグ・ユー・パードン」を繰り返した。でも慣れるに従って「パードン」が少しづつ減っていった。

ところがヘルシンキはいけません。現今では英語を話す人が沢山居るとのことですが、当時は全く駄目。「イクシ・カクシイ・コルメ・ネリア」これは数字の一二三四です、耳で聴いたので正しいとは思いませんが。

或る日ホテルで、西田修平君と二人でアイスクリームを食べようということになり、メイドさんに頼んだが全然通じない、諦めることにした。暫くしてドアがノックされ、入ってきた男が、

「アイム・ミスター・エスクリン」と名乗り、このホテルの番頭さんで、

「何か御用ですか?」と、英語。

これには全く驚き、可笑しくなって、

「いや、メイドさんにアイスクリームが欲しいと云ったら……」

「おお、ヤーテレ」

初めてフインランド語でアイスクリームのことをヤーテレと知った。食べたかったから頼んだわけだが、やっとありつけたアイスクリームの味は忘れ、ヤーテレだけが残った。これは私が二度目にユニバシァードの選手として欧州遠征に加わった時のことで、英国遠征の時のことではない。

しかし、フインランドという国は素晴らしい。

丁度滞在したのが夏であったので、街には一っも電灯が灯ってなくて、要するに白夜の連続で夜の無い国であること、皆様ご承知だ。それでも夜は十時にベッドに入り、まだ太陽が見えていた。

朝は私も、同室の西田君も寝坊で、朝食にカスカス間に合う程の朝寝坊の二人だった。

スエーデンでは、ホテルのモーニングコールも聞こえず白川夜船で、危うく船に乗り損ねて、織田先輩に大目玉を戴いた。その後の旅は三人部屋で織田先輩と同室、窮屈この上なく、その上先輩は朝、六時に起きて体操で、ドタドタで寝ていられず、五日目位に謝ってやっともと通り二人部屋に寝ることが出来た。

西田修平さんと

――大学時代――

昭和三年―不景気時代であった。私はそんなことは理解出来ない年頃で、十七才であった。走ることが速かったので早稲田大学に入れてもらった。

その四月に西田修平さんと知り合ったと云っても、お互いに誰れとも知らず、競走部の練習場で他の大勢の新人部員と共に、先輩諸子の真剣な、それこそギラギラするような殺気に満ちた練習に尻込みしながらコソコソ走っていた。何故こんな猛練習をするのか、大学の練習とはこんなに凄いものかと、私は呆れるばかりで練習にも打ち込めなかった。

幸運と言うものは不思議なもので、大きなチャンスを与えられた、織田先輩によって――。

陸上の神様と言われる大先輩の織田幹雄―私は神様とは言わないし、また思ってもいない。先輩は普通の人間で、只々人の倍も三倍も努力し、研究し続けて、大成された方であると信じている。

日本人で初めてオリンピックに優勝し「日の丸」を高々と揚げ、「君が代」を吹奏させた。あの第九回オリンピック・アムステルダム大会であった。

私は何万かの観衆の中に居て涙がこぼれた。あの感激は胸に焼き付いて忘れられない。オリンピック主催側の人々は、日本の国旗も君が代も用意していなかった。世界中の人々も、私達日本人自身も、優勝なぞ考えていなかったから、その準備不足は無理からぬことゝは考えられるが。大急ぎで、スタンドの上にはためく参加国の国旗の中から「日の丸」を取外し、全くハーモニーの取れない「君が代」の吹奏には、腹立たしさを越えて、「ザマアミロ」と思った。

その織田先輩が、私が陸上競技界に出るチャンスを与えて下さった。

反面、また正直に云うと、ナンバー・ワンの位置を保つのに苦労の連続の何年間でもあった。

そのチャンスと云うのは六月の早慶対抗戦で、今迄走ったこともなかった私に織田先輩は、四百米競走に出ろと命じ、私はブルブル顫えながら走らされた。当時日本のナンバー・ワンの岡田英夫選手（慶大・故人）に、間違って勝ってしまった。ひとり織田先輩だけが、私の勝ちを信じて居られた。

その結果、既に決まっていた早大競走部の欧州遠征の一人として加えられ、私は初めて先輩諸子のあの猛烈な練習の謎が解けた。

その遠征に新人選手として加えられたもう一人の男がいた。背が高く、色白のスリムな少年ー十八才ーが、西田修平君であった。一っ年長と云っても私は三月生れだから幾らも違わない。遠征以来、六年間の学生時代を通じて、陸上の上での親友であり、老境の今に至る迄も、最も親しく付き合わせてもらっている。

今迄、彼を西田君と呼んだことはない。「修平」と、呼び捨てゝいた。彼は私を「イタ公」と、呼んでいた。

現在は「西田君」「修平さん」と、私は呼び、彼は「中島君」と云っている。でも時々「イタさん」とも云う。

彼はワセダに入ってから初めて棒高跳を始めた。中学時代は名もない水泳の選手だったとか。

練習場へは先輩方より前に出て行き、諸々の器具を揃えたり、走路のラインを引いたり。これは新入部員としての当然の仕事であった。

百数十名の新入部員も、一年も過ぎない内に半分以下に減って、それを過ぎてからも次第に消滅してゆき、耐えて残った者が実力を付けて、第一線で頑張り、「都の西北」の栄光を守り、常にワセダ優勝を勝ち取り続けた。

西田君は、競走部に入った動機に就いては私は知らないが、彼は先輩が棒高跳の練習の時は、砂場を均したり、バーを上げ下げしたりしていた。彼は先輩の跳

ぶ高さでは高過ぎるので、先輩のトレーニングが終ってからバーを下げて、自分が跳べる処から始め、一人で黙々と練習していた。

恐ろしい男！彼が棒高跳に合っていたのか、棒高跳が彼に適合していたのか、それこそ短期間に上達し、先輩諸子の上を行き、皆をアッと言わせて、いきなり日本陸上界の彗星の如き存在となった。彼は学問も出来が良く、理工科に在籍していて、私は彼が大きな三角定規を抱えて歩いているのを時々見掛けた。

さて修平―これからは斯う呼ぶことにする―と私との関わり合いに就いて書いてみることにする。想い出す侭に話そうかと考えたが、うまく纏める力のない私には項目別に捉えて書いた方がいいように思われるので、そうすることにした。

最初の欧州遠征

昭和三年、早稲田大学競走部は単独で英国遠征を敢行した。単独の陸上チーム遠征は史上今に至るまで早稲田が唯一である。挑戦の相手は、アキレス倶楽部。ケンブリッジ、オックスフォード両大学の現役とＯＢとが合体して組織しているクラブであった。対抗戦の場所は、ロンドンのスタンフォード・ブリッジ競技場だった。

修平と私は新人として、二人だけが遠征チームに加えられた。

当時は、船で行くか、シベリア経由か二つの経路であった。費用と時間の関係で私達は東京駅を夜行で出発し、朝鮮、満州を通り、ハルピンで食料を仕入れてシベリア鉄道に乗り込んだ。

出発の夜、東京駅は見送りの人々で混雑していた。私は入学早々の為学友もなく、見送りは二人だけ。父は病床にあったので、東京住まいの叔父と、御殿場から出てきた母であった。

母は、振袖のお嬢さん達が先輩諸兄それぞれに花束を捧げているのを見て、構内の花屋さんから花束を買ってきて私に呉れた。私は怒った。そして消え入りたい程恥ずかしくて、母を怒鳴りつけた。親不孝者。

着たこともなかった洋服。初めてのネクタイ。ネクタイの締め方を先輩に教わり、それを解かずにおいて、首の方を通していた。その上、現代の様なワイシャツと違って、カラーとシャツが別々で、一々ボタンでカラーをシャツに付けるもので、とても難しく厄介極まるものだった。更にその上、三百円という大金入りの胴巻を腹に括り付けていた。それを行く先々で両替の為お札を出し入れした。

……中途半端だが、この続きは日を改めることにして此処で打ち切る。面倒臭くなったから。

続・西田修平さんと

続きを書く気になりました。中途半端では「修平」に申し訳ないし……

彼と僕

修平君は、生まれも家柄も立派だ。嘗て彼の父は郁平さんと云って、衆議院議員で、弁護士先生で、和歌山市の旧家である。

それに引替え、私は御殿場の小さな貧乏な商人の一人息子であった。三代目の私が世に云う「三代目は駄目だ」で、甲斐性もなく、現在は私の息子が田舎の屋敷の管理を、東京の会社勤めの傍らやっている。お寺の総代も息子である。私と正反対で、奴はネズミ年生まれ其の侭、チョコマカよく動き回って働いている。

修平君は頭脳明晰、理工科を卒業して、機械屋として日立製作所に入り、偉い人になった。その上、陸上競技をこよなく愛し、日本陸上界に多大の尽力、貢献をした。現在も国際的な競技会が行われると、必ず選手村の村長、村長と云えば

修平君にお願いすることになっている。来年、日本で開催される第三回世界陸上でも恒例の村長様。都内の有名な大ホテルを借り切って、選手村の準備の為多忙な日々を過している。

それに対して私は、怠惰で我侭で、陸連の事なぞ何もしない。貧乏者の子沢山で六人も居て、食べさせるのがやっとであったことも理由の一つ。しかし、私は管理されることの大嫌いな怠け者である。昔、大学時代に数々の日本記録を作ったが、六年間の競走部生活中、選手会には一度も出たことがない。先輩達は大分文句を云っていたようだが、私は好きで走っているのだから、欠席が以ての外と云うなら何時でも退部しますと、傲慢無礼に構えていた。従って部の役付きになぞなったことがない。もっとも人の面倒を見る力も、その気もなく、ほんとに悪い奴の標本みたいな男、選手会がある日なぞ私は、ガールフレンドと銀座の資生堂でコーヒーを飲んでいた。

学問は嫌いだった。そのことでたった一つの例外を話さなければならない。

三年生になった時、ふと間違って、「今年は日本記録を幾つも作る。学部では勉強で一番になってやろう」と、決心した。後の方は大それた事であったが。

人間って不思議なもので、実は両方共、実現してしまったのだ。

学問の方は、試験の時、「カンニング」もやったけれど、「カンニング」を成

功させるには普段、勉強しなければ出来るものではないと知った。だから朝晩、机に向かった。勿論、競技のトレーニングも懸命にやった。

この文武両道のことは誰も知らない。

学問で大隈公のブロンズを、学友会から頂いた。あの大隈講堂で。戦時中にもこれだけは供出しないで、大切に保存している。両親は、又、競走で貰ったと思っていた。私は説明しなかった。両親が亡くなって今になって、あの時、貰った理由を話したら、きっと大喜びしてくれたと思い、それを後悔し切れない気持でいる。

純情物語

それは修平君と九州の福岡の何処かへ、何だか知らないが確か、新聞社の依頼でコーチに行った時のこと。

誰に頼まれたか、何処でコーチしたかなんてことは全く忘れたが、福岡の立派な料理屋さんで、その窓から川を見ながら、「水炊き」という名物を二人で何人前か知らないが、先方が驚く程食べたことを覚えているが、誰が御馳走して呉れたのか、その時も今も判らない。

元来私は、走って強かったが、他人に教える才能は無く、又コーチなぞ面倒臭くて嫌いだった。

だから、自分で考えて苦労して激しい練習をすればよい。そして一生懸命、大会には戦って、その結果が勝とうが負けようが、一所懸命やったらそれで自分は立派だと思い、悔いなぞ無かった。だから無能だけれど何事でも懸命にやる「ドウ・ユァー・ベスト」之が偽善者の私であることは、少し自慢したい。

その御馳走の帰途、夜行の三等車に乗った。翌日から大阪朝日新聞社に頼まれた陸上講習会であった。誰に教えるのか、そんなことは忘れた。

福岡でお土産を貰った。有名な「博多人形」であることは、貰った時解った。相手は「これは貴重なものです」と勿体を付けて手渡したが、私は興味もないので嬉しくもなかった。

さてその三等車で修平君と向き合って座ったが、ふとどんな人形を呉れたんだろうと思い付き、箱を開けようということになった。私が箱を開けて人形を取り出すと、素晴らしい美人であった。

その瞬間、修平君が「アッ！」と云って、私の手から人形を索早く取り上げてしまった。私は呆気にとられて修平君の顔を見た。そしたら彼はソッと、その美人の人形の裏を見せてくれた。「アッ！」と私も思わず声を出し吃驚した。

その理由は、人形に秘密が潜んでいて、同時にそれは修平君と私の当時の純情を証拠だてるものだった。

その人形の裏側は男女二人の、口にも出せない姿（ＳＥＸの交歓図）であったのだ。何で聞いたか後で、それは好事家にとって貴重なものであったとか。

私達は二人で、「如何しよう？」困って種々と相談の上、結局列車のデッキから走り去る真っ暗闇に向かって投げ捨てゝしまったのだ。何十年も経ってみて、惜しいことをしたもんだ、と知った。

以上が、西田修平君と私の若き日の純情物語です。皆さん、現在の皆さんなら如何するだろうか？私はそれを知りたくない。

おたいくつ様

もう一つ

もう一っ、皮肉でも何でもなく、率直に誇りにしていることが一っある。

それは現在、陸連から表彰された幾百という男女諸兄姉が列記されているが、（ベースボール・マガジン社の陸マガ特集記録）その中に、ほんとに幸いにも私の名前が何処を探しても無いことだ。陸連には何一っ役に立っていない私である。

だから功労者に値しないのは当然、名のない道理であるが、私の名が、全く載ってないのは、私の最大の誇りである。筆が滑ってしまったのは、これもやはり、修平君との親交故なのであるが……。

現在私は、ベースボール・マガジン社の陸上部アドバイザー。陸上生活に十幾つの日本記録を更新した事実を認めて、無能な私を気持よく、或は頑固に置いて呉れる社長のお蔭なのであるが、この入社も直接マガジン社から話があった時、即座に私は何も出来ないからとお断りした。ところが社長は、私と修平君の間柄をご承知で、修平君から突然、私に電話があった。「池田社長と何日の何時に面会しろ、俺は水道橋の駅で待っているから」こっちの言い分も聞かずに決定し、そうして現在に至っている。全く修平君の友情の発露であると感謝している。

再び云うが、皮肉でもなんでもなく、負け犬の空吠えでもなく、陸連の功労者に名の無いのは、役立たずの自分だから当たり前のこと、私の真の姿、真実とても嬉しいことなのでつい書いてしまった。幸福者の私。神に感謝、エーメン。

若気の至り

半世紀前のロサンゼルスは、光化学スモッグもなく、空は青々として小さな雲が点々と流れ、暑くても乾燥しているので、心地の良いカリフォルニア独特の西部の香が感ぜられた。私にとっては外国遠征は三度目で、生意気になり得意にもなっていた。第一〇回国際オリンピックの代表、陣笠選手の一人だった。

折柄、満州事変の勃発、私は、日本国は世界三大国の一っ、自分の国は偉い国だという誇りを持っていた。当時、在米邦人は白人に虐げられていて、その実情を目の辺りにして、邦人の立場に立って義憤を感じてもいた。

今考えると、考えるだけで恐ろしいことをやってのけたものだと思う——

それは１６００リレーの予選の時だった。

私は第一走者で、スタート地点でコース順の籤を引き、内側の良いコースを引き喜んでいた。

コース順の抽選は、ピストルの空薬莢に数字を書いたのを帽子にいれて掻き廻し、選手に引かせるという方法だった。

何気なしに外国選手がコース順を引くのを見ていた私の眼に運悪く（？）某国のノッポが役員の帽子から籤を三っばかり掴み出し、良いコースを素早く選んで要らない籤を帽子に戻すのが飛び込んでしまった。見ていたのは私だけ、私の血は騒いだ。途端に私はその選手の胸倉――といっても相手がデカイのでユニフォームに取り付いて、

「テメエ！」

吃驚しているのに向かって、

「インチキしやがった！」と、怒鳴りつけた。私は顔が青くなったのを覚えている。スポーツマンシップが許さないぞ！大日本帝国の国民を代表して不正は断固許すわけにいかないんだ！

何万の観衆は、何が起こったのか知るはずもない。こうなれば騎虎の勢い、私は離すものかと、ノッポに食いついて離れない。

委員たちが通訳共々走ってきた。

私は、息を弾ませながらインチキ事件を説明し、走路上に私はあぐらをかき、果てはその場に大の字なりに寝て、

「やり直さなきゃ出ねえ」と、叫んだ。

事情を知って、そう云えばと―他の選手たちも了解し、籤引きはやり直しとな

った。

やり直しで、私の籤は一番アウトコースだった。でも、事件落着でスッキリした私は、気持良く走り、トップで次の走者にバトンを渡した。そのまゝ、この予選レースは日本がトップでテープを切った。日本記録とか。私は記録にはこだわらず、「勝つこと」が、一番の目標だった。

その意味で、決勝は五等で入賞出来たが、私は不満だった。

選手同士は日頃、お互いに友達で、大いに国際親善に役立っても、トラックへ立てば敵である。激しい闘志が燃えなければならない。

オリンピック村は郊外のなだらかな岡の上で、日本村、米国村……等々、各自の食堂があって、殊に私達は日本食堂と洋食堂で幾らでも食べられた。村の周りはカーボーイが巡回していた。

白人が私なぞの陣笠選手にもサインを求める、その様子を見て、邦人が「ホワイトが日本人にサインを……」と云って吃驚していたのが意外で、深刻な思いにもさせられた。

年をとって、若い時の行動を反省している。反面、若くなければ出来ないことをやった誇りも、少しはある。

何故か、私は決心した
―大学三年目の変心―

私は三年生になった。商科は約四百名だったと思う。

その年の正月、私は田舎の雪路を走っていた。手拭で頬かむりをし、ヅックの運動靴―現代のスニーカーに代わるもの―トレ・パンなぞはやっと出始めた頃で、田舎道で人が来ると、私は素知らぬ顔で歩き出し、人が居なくなると又走り出した。要するに現代のジョギングであるが、当時は気違い扱いにされかねない有様であった。

前年、ドイツの選手を迎えて開催された日独対抗に代表に選ばれた私は、コテンパンに敗けた。国内では敗け知らずが、敗けた。何とも言い知れぬさみしさを感じた。と共に、今迄真剣に打ち込んで練習をしたかと反省した。

雪道を走り乍ら、暗い気持で考えた。一生懸命練習して敗けたのか？いや、そうではない、日本一と言う自負心が私を駄目にしたのだ、と知った。

ふと、大それた考えが私の脳裡を走った。

今年は何回か日本記録を作る。

作れるような自己管理をして、自分に合った練習を考えて、之れを真剣に実行する。そして、レースに勝って日本記録を幾つでも多く作る。

その上、大それたことだとは思ったが、学部で学業一番の成績を取ろう、と。

これは不可能かもしれないが、その結果は考えず、兎に角、一番になると云う気持は固く持った。

朝に、夕に、勉強した。

昼は練習に打ち込んだ。仲間の友人達とも口をきかず、凡ゆる部則を破って、我利我利亡者になった。誰にも邪魔されず、好き勝手、而も酒もタバコも自由にやった。

世間の風評は悪かった。それでも私は勝った、勝ち捲った。『勝てば官軍』これは真理で、現今でも通じる。ただ、言いたいことは、凡てを承知して、自己鍛練に徹しなければ出来ないし、楽をして勝とうとか、スター気取りになったりは以っての外だ。

その結果は、自分の考えていた以上に良い成績を達成出来た。

日本記録は確か、種々の種目で四つ作れた。

学業は一番ではなかったが、それに近いものであり、大学創設者である大隈侯の壁掛け銅像を、学友会から贈られた。あの都の西北に聳ゆる大講堂の地下の小講堂で、多数の学友の前で拍手に迎えられて、当時の小林博士より授与された。併し私は、変わり者かもしれないが、大した感激はなかった。レースでも、幾つ優勝しても大した喜びは感じたことがない。

その春、極東大会―現代のアジア大会―で、予選、決勝と二日続けて新記録を出し、或る大きい壁をタイム上で破ったとマスコミに騒がれた。

でもその夜、仲間と銀座へ出た。翌日はリレーが二種目あるけれど、別に心に留めることもなく、銀ブラと云う奴をやった。四丁目の服部時計店のショウインドウに、幅一米以上もある私のその日のゴールインの写真が出ていた。朝日新聞社の提供と書いてあった。友人達が、一定期間が過ぎれば不必要になるから、申入れして、呉れるように頼めと云って私を店内に引きずり込んでしまい、友人の口添えで貰えるように約束して呉れた。

その写真は半世紀以上も過ぎた今も、色も変わらず、家の中の何処かにある筈だが、大き過ぎて置く場所がない。それ程に家が狭いのかも知れぬ。

斯くして、この一年は充実した、自分自身を活かし、我侭気侭に行動し、悪い事、良い事、人の風評を気にせず、やりたいことを次ぎから次ぎへとやった。「練習しないで強い男」と云われたのもこの頃であった。

併し私は、人前では猛練習はやらず、コッソリと死ぬ程苦しい練習に堪えたことは、織田幹雄先輩と親友・西田修平君以外の人は知らなかった。

学業で頂戴した大隈さんの像は、織田先輩が幾十年も過ぎて私の家に、奥様と訪ねて下さって昼食を共にした折、私は初めて像の由来をお話したら、驚いておられた。是はほんとに嬉しかった。

文武両道という言葉があるが、その学問の方は試して見て、やれば出来ると判ったので、以後卒業する迄、一切学問は捨てた。卒業試験に失敗して、諸先生の御宅へ「敷島」と云う黄色いタバコの箱を持って廻り、奥様に頼んで点数を貰い卒業することが出来た。

「なせば成る、なさねば……」

いい加減な私にもこんな時もあった。

練習方法雑記

「どうしてこんなに気持よく走れるのか分からない。うん、腕だ、腕が体全体を前へ前へと押し出してゆく……」

これは、レースの最中に突然やって来た爽快感、眼に見えない網で引っ張られているようで、限り無く軽快に走れる感じなのだ。

並んで走っているのは、彼の有名な吉岡隆徳さん。確か関東インカレの二百米決勝の百五〇米を過ぎたあたりだった、あの宙翔ぶ感触が現われたのは。メインスタンド前、直線路で行われる二百米。

「俺の勝ちだ」

勝利を既に予知してしまっている私の至極冷静さに自分で呆れた。

レースは勿論勝った。しかも21秒3の日本新記録。

走るのは腕だ。勿論、体全体のバランスが取れていなければならないことは、言うまでもないが、腕の振りを大きく、肩の力を抜いて、脚と腕の回転があだかもSLの機関車のように、無理なくピストンのように回転しなくてはならない。

是れに気が付いたのが、この二百米決勝だった。

当時は誰もコーチしてくれる人もなく、科学的な練習方法なぞ何んにもなく、自分で自分の弱いところ、良いところを自分で知り、弱い処は色々な方法を考えて鍛えた。例えば、私は腕が細くて力が弱いので、当時ウエイト・トレーニング用の機械なぞないので、エキスパンダーを柱に結び付け固定して、前に引き、後ろに引いて、力を付けることを繰り返してやった。脚にも結び付け、前に後ろに引っ張った。

スキーで有名な、陸上でも活躍した先輩・麻生武治さんに勧められ、腹筋、腕、脚力を鍛えるには最上だということで、私はスキーを始めた。

無論あの頃はリフトなぞ無かったので、登りにはストックワークにより腕の力をつけ、スキーが後滑りしないように腹筋と脚で体を前へ前へと運ぶ力をつけ、脚と腹筋は平地滑走で更に鍛えるように努力した。

だが本当のことを云うと、恥ずかし乍ら本来そうした目的のスキーが完全に忘れられて、スキーそのものゝ面白さの虜になり、冬のジョギングの外は、山岳部の合宿に入れてもらってフレッシュマン同様に扱ってもらい、そのうち専門のスキー選手より強くなった。

このようにして、腕の振り方に重点を置いた練習方法をとり、その効果は確か

に表われたように感ぜられた。

平素の練習は先ず、定石を充分に頭に入れて基本の練習に専念し、長時間の走りはやめることにしていた。シーズン中は特に、体調の調整に努めて、殆ど軽い練習だったので、「練習しないで強い男」と、余り芳ばしくもない噂が振り撒かれていた。私は頑固者だったから人の噂なんぞ気にしなかった。

正しく走るには、絶対に頭を動かさず、腕を強くかるく振っても、両肩を左右に振らないように心掛けた。各関節の力を抜いて。

現在ゴルフのスイングの時、ヘッドアップするなと云うのは、私は体全体が心棒になってコマが廻るようであれば自然と、ヘッドアップは避けられると、素人考えをしている。頭も体も同時にバランスがとれゝばヘッドアップしないと見る。

走るのも同様だと私は考える。

現に外国の強いランナーは、腕を推進力として非常によく使って、上体の動きは殆ど見られない。

従って、胸を張り、腿を上げ、後足の蹴りを後ろへ流さず、機関車のピストンの如く無理なく回転するように、而も各部の関節は力を抜いて走ることを心掛けなければ、良い走法は不可能だと思う。

腕の振りについての重要なことは、現在の日本陸上界では余り重視して呉れる人が少ないように考えられる。私の意見が間違っているのか、現代の科学的練習方法が重要視されて私の理論は古いのかもしれない。

歩くこと、正しく歩くことから始めることが、合理的な走りにつながると思う。この時注意すべきことは、後ろになった脚をなるべく延ばすことが肝要だ。だから走るときは後脚は足で地面を叩き付け且つ、押し出すようにし同時に、腿の力と腹筋で前へ運ぶこと、引き上げることが肝要だ。

多くの日本選手の方々は、少し足が後ろへ流れるような感じがし且つ、腰が折れている。これは一番悪いことだと思う。頭および上体を心棒にして上下動なく、水平に走ることが一番大切なことだ。

根本からこれを頭に入れて練習を重ねることを私は、定石だと云いたい。

無闇に長時間走ったりすることは、何の効果もなく却ってオーバーワークになってしまう。ついでに私は、完全に休養する日をとることが重要だと考える。仮に三、四日走らないでいると、体が自然と走りたくなって来る、そして楽しい走りが出来るようになる。シーズン中は三、四日と休むことは出来ないが、週一回は何もしないでボヤツと一日過ごすことを勧めたい。

シーズン・オフの猛練習に就いて少し、私の経験を述べてみる。

先ず冬期は、絶対にスパイクシューズを穿かないこと。

トラックでもロードでも、只々走り込むことを重点にして、体力の増強とフォームの矯正に努めた。スピードの練習は避けて、唯々走り込むこと。

私は昔の選手なので、今から半世紀前に冬ロードを走っていると、気違いと間違えられて、母に止めてくれと云われたことが度々だった。

そしてシーズンに入る三週間程からスケジュールを立てゝ、軽く本格的な練習を始めた。

夏期の練習は、一定の期間、十日間を定めて、その間私は午前、午後二時間宛計四時間を、それも午前は十時から、午後は二時からと、最高に暑い時間を、ぶっ倒れる程走り抜いた。兎に角、百米を全力で走っても十二秒を切れなくなる程になる迄、死力を傾けて走りに走った。最後の十日目には、トラックに出たゞけで目が眩んで、殆ど走れなくなってしまうのだった。その間、無理して食って体力の補充をした。

それからが大切だ。全く走ることから縁を切って一週間の間、寝転がってボン

ヤリ本を読んだり、軽く泳いだり、散歩したり、何もしないで只管、走ることを忘れるように努力した。

斯うして何もしないで居ると、四日目位から何だか自然と体が走りたくなって来る。それを我慢して一週間続けると、もう走らないでいるのが苦痛になって来る。

そこで今度は、スケジュールを立てゝ、軽い正しい練習を始める。

特に自分の欠点であるスタートを始めるが、無理して早く出ることは避けて、皆に遅れないようにスムーズに、力を抜いて出ることを心掛けた。それでもスタートは上手にならなかった。

或る夏、奈良の美吉野で合宿練習した時、大軌鉄道、今の近鉄の柏原駅長さんをやっていた、その昔短距離で第一人者だった彼の有名な谷三三五先生が私に、「君はスタートが下手だ。どうだ私について練習してみないか？」と、云って下さった。私は喜んでお願いした。

暑い、それこそ猛暑と云っていい時間に谷さんは、斯うやって何も考えず、禅に入ったような気持になってやれ、と云って、額から汗をポタポタ流しながら私に教えて下さった。

私は一生懸命に覚えようと、覚えなければ汗だくの先生に申し訳ないと、それ

こそ真剣にやった。しかし幾らやっても、残念乍ら谷さんの言うようには出来なかった。

丁度後輩の高野忠幸君が一緒に教わったが、彼は頭が良いせいか三日目には、谷さんの走法を会得してしまった。私は駄目だった。谷さんは到頭諦めて、

「中島君よ、君は気にするな。私の走法は忘れて、今迄どおりに自分流のスタートをやりなさい」

と、匙を投げられた。

私は、何とも申し訳ないと、谷さんに丁重な御礼を申し述べたことを思い出す。谷さん、ほんとうに有難うございました。

高野君はその後成長して、私と競うような立派なスプリンターになり、競走部には無くてはならぬ選手になった。が卒業後、戦死してしまった。忘れることの出来ない高野君として、私の頭から離れない選手である。

凡ての競技に於て、勝ちたいのは誰でもだが、勝った人の勝つ迄の必死な、尊い努力に思いを致し、それに先ず最大の敬意を払わなければならない。

競技であるかぎり、勝つ者の裏には必ず負ける者がいる。それなりに努力し練習して、自己の力を出し切って負けた者にも同じように、最大の敬意を表わさな

くてはならないことを私は知っている。

ただ、普段の練習では素晴らしいフォームで強いのだが、いざ競技会となると自分の力を十二分に発揮出来ない人が意外に多いと思う。何故か？私には判らない。

私の頃の昔の選手は多くの人が、大きい競技会になればなる程、自分の力以上のものを出した。おこがましいが私も、その一人だった。西田修平君なぞは普段の練習で見るかぎり、あの大記録は思いも及ばなかった。而もロス、ベルリンとオリンピックで二度とも米国選手と競り合って優勝を争ったことは皆も知っての通り、その彼は私の同期、繰返しになるが自慢の我が親友であると書くのは小気味よい気分である。

母に詫びる

一九二八年と言えば、うんと昔のことになるが、当時の私の想い出が如何に現在の世の中と遠く隔たったものであったかをしみじみ感じる。

六月のその日の夜、東京駅構内の広場は大勢の見送り人で溢れていた。美しい振袖に着飾った令嬢たちも多数笑顔を湛え、花束が選手達に手渡され華やかな光景であった。

ふと気が着くと母が居ない。

母は、私に花を呉れる女性が一人もいないのを見て、私が寂しいだろうと思い込んでいたらしい……。

早稲田競走部が二十数名で英国に向かっての出発の夜が、この時であった。今の駅の様子とは全く異なり東京駅は旅の唯一のスタート地点、大歓送の波であった。

私はワセダへ入学早々だったから、学友は一人もなく、たった独り母が見送りに来ていたのである。

私は、田舎者の母と居るのがとても嫌だった。自分の田舎者をさておいて。私は見え坊である。

突然、母が私に花束を押し付けた。構内の花屋で買って来たもんだ。

〈一人ぐらい美しい女性が自分の伜にも花ぐらい呉れてもいいのに。伜は只一人で寂しかろう〉

と、母は思っていたらしい。

私は怒って、

「みっともない、よせよ、俺のそばに来ないで呉れ」と、強い口調で言った。

やがて列車に乗り込んだ。私達は二等寝台車だった。

私は自分の二階のベッドに横になったら、何だか大金持のような気になった。

母は同じ列車の、初めて乗った二等車で一人ポッねんとしていた。当時はまだ丹那トンネルは無く、御殿場回りが東海道本線で、急行列車は我が家のある御殿場駅は通過だったので、母は沼津駅で降りたわけである。

沼津は私の出身校のある処だから、誰か出ていてくれるかもしれないと思ったが、思い掛けない沢山の先生や友人たちが賑やかに見送ってくれた。

母は何処に居るのか見当らなかったが、今思えば、見送りの多さにホッとし、

嬉し涙を流していたのだろう。それに夜中では御殿場まで帰ることは出来なかったゞろう。

今になってみると、全く済まないと母に詫びたい。

当時なら家が一軒建てられる位のお金を呉れた。それも手の切れるような真新らしい拾円札で、落さないようにと、昔の道中巻に入れて、私は母に腹巻迄も締めさせられた。

父が病気中で、母は如何してあんな大金を作ったんだろうと、いくら考えても判らない。聞く時もなく死んでしまった。あゝせめて沼津駅迄でも母と話していたら、母は喜んだに違い無いと後悔している。

その数年後に、アメリカへ行った。第十回国際オリンピック・ロサンゼルス大会だった。私は陣笠選手として代表に加えられた。

ロスでの調整期間は、楽しくて毎日が、とても充実していた。

パッチーと云う二世の女の子と仲良しになって、いつも夜は車でドライブした。

但し小型トラックであった。それでも未だ日本では日本車は一台も製造出来ない時代のこと。

夜のドライブは暗闇を、カーラジオから流れ出る甘い音楽に乗せて、ほんとに夢の中のようだった。

時々そのトラックにメロン―ハネジユー―を幾箱も差し入れてくれた。彼女の家は農家だったのだ。

或る日、街をドライブ中、警官に停められた。彼女は何か言い合おうとしていたが、私はそれを黙らせて、ハンドルを握ったまゝ、

「ボクはオリンピック選手だが、どうやら道をロストしたらしい」と、云った。

ポリさんは途端に態度が変り丁寧に、

「そうですか、貴方は逆に来ちゃったんですね、馴れないから大変でしょう」

オリンピック選手てのは堪らない、良いもんだ。

パッチイは私の頬にキスした。

「あの警官、ころり態度変えちゃって……いい気分」

パッチイは私に体を寄せて離れなかった。ラブシーンというより私には、排日で虐げられている日本人の苦境がよく分かるような気がした。

母から太平洋を渡って、手紙が来た。

何か新聞に、私が運転して何かしてお巡りさんに叱られたとか書いてあったの

を読んだのだろう、母は堪らなく心配して自動車なんか決して乗らないでくれと、くどくど書き、お前は日本の代表選手なんだよと、止めを刺すことを忘れなかった。手紙の内容よりも、私には懐かしさが先に立った。

車のことで、もう一つ想い出がある。

オリンピック村の前の広場には大勢の見物人が来る。或る日私は、停めてあった、あの警官の白いオートバイを見詰めていた。日本にはオートバイは米国製のハレイ・ダビットソンとインディアンしかなかった。私は親に隠れてそのハレーで走るのが一番の楽しみで、ガソリン一升買って来て走っていた、勿論、人のを借りて。

ポリさんが「君は好きか、乗れるのか?」と、云った。

頷くと、「五分間、乗ってきてもいい」と云ったので、良しとばかり私は得意に胸を反らして、三分間走り回った。乗れないと云えば恥、これは私の誇れるちっぽけだが一つのエピソードである。それにしても若いから出来た。若いと云うものは実に良いものだと思う。私は確かに、どこかケタのはずれた若者であった。

私がオリンピックへ行っている間、私の家へ女学生が手伝いに来ていたそうだ。

それは私が或る夏、コーチに行った学校の生徒さんだった。母はその生徒さんを使うなんて、女と云うものは厚かましいもんだと思った。言い訳になるかも知れぬが、私はその生徒に別に贔屓したようなことは何もなかった。

その生徒さんは良く働いたらしい。

母はお嫁に貰えと云って、私を吃驚させた。

しかし後年、母は、「あの娘さんはよかったネ、あんたの処へ嫁に来なくて」私はすっかり、見くびられてしまったわけである。

昭和十五年の秋私は、第二乙で召集されて中支の第一線に居た。

初年兵は辛かった。早く上等兵になりたいと願った。私は大学の教練をさぼったので、幹部候補生になれなかった。古兵さんは私を「おい、オリンピック」と呼んでいじめて楽しんでいた。

或る作戦の戦闘の時、私の小隊は退却を命ぜられた。折角ここまで来て退却とは、とは云え兵隊に理由はいらない、たゞたゞ逃げた。我が逃足の早さ、多分、世界記録の出るスピードだったような気持ち、ドタ靴で私は物凄く速く走った。怖さ一杯の中に、あの速さはフォームも正しく実に美しく走れた自分を、今でも忘れられない。

「若し命があって帰れたら必ずお礼参りに寄越しますから、伜を守って下さい」

郷里で母は、遥か下総の香取神宮まで私のためにお願いに行った。

運良く帰還した私に母は、

「なるべく早く、香取様にお礼を申し上げて来てお呉れ、私は神様と約束したのだから」と。

私の返事「約束したのはあんたで、俺は約束なんかしないから行かないよ」そう云ったら、母は泣き出した。

言い過ぎたと気付き、「その内行くよ」と、ごまかした。

心では行こうと思ってもゴルフなんかに夢中になって、行けなかった、いや行かなかった。

そのうち母は、肺結核で、眠っているような顔をして静かに死んでしまった。

枕元には一冊のバイブル（聖書）が置いてあった。

私は大急ぎで、一番下の娘を連れて車で香取詣でをして来たが、やっぱりスツキリとはしなかった。

話をオリンピックに戻す。ロサンゼルスから帰ると、御殿場の家から、お祝いをするから帰って来いと云って来た。

ロクな成績でもないのに――。

四百米リレーでは、吉岡隆徳―南部忠平―阿武巌夫―中島のオーダーで五位。千六百米リレーは、私―増田礒―大木正幹―西貞一で、これも五位であった。元々私は集会が嫌で、オリンピックの制服で来いなんて云うから、注文付けるなら行かない、と云って、普通の服で出掛けた。

現代ならオープンカーってところだが、少女から花束を貰い、約二千米位ある小学校まで、歩いて行進した。左に町長（まだ市ではなかった）右に父親、その父親が偉そうに見えてほんとに嫌だった。

小学校の講堂で一応報告を無事に済まして、家に入って行ったら、母は、

「お前、演説出来たかよ？……私はそれが心配でたまらなかったよ」

「俺、これから東京へ帰る」

「何だって……又そんな我が儘云って」

「そうじゃないんだ、明日、歓迎競技会に出なきゃならないから」

「でも折角の御馳走どうすんのよ、近所の人に何て云ったらいいのさ……」

私は、集まってくれた人々に礼を述べ、訳を話して、その夜の汽車で東京の合宿に入った。

競技会の日は、雨模様だったと覚えているが、その時、日本記録が出たと後で

聞いた。

選手としては、立派だとはお世辞にも云えない自分だと、私は知っていた。「勝てば官軍」と云うことを知っていて且つ私は、自信が強過ぎたから、何とか大学六年間、日本一で過ごすことが出来た。しかし反面、勝てば……なんて、嫌いな言葉でもあった。

私は、練習しなくても強い男なぞと云われたが、シーズンオフに猛練習していたのを、誰も知らなかったのである。シーズン中毎週のように競技会で走って、その間、猛練習していたのでは、一米七〇糎、五十二瓩の体が保つ筈がない、それこそ駄目になってしまう。しかも自分の管理は自分でやる外なかった時代であった。

「練習しなくて強い」の真相は以上であるが、「立派だとはお世辞にも」に就いては又、お袋が登場する。

お袋は物凄い苦労性で、私のダンスホール通いを知って、「あゝうちの伜は悪い女に引っ掛ってしまった」と、勝手に決めて、私を叱りつけた。

私は弁明も説明も面倒なので口先で、「もうやらないから安心して呉れ」と云った。

その頃の私は、無い金を都合してホールに通った。
ライトが消えたラストダンスのあと、指に力を入れて握られて、それが嬉しくて。なぁに、相手は商売だと判っていてもダンスはやめられなかった。
或るお店の娘さんと仲良くなって、たった一度デートした。お袋は何処で調べたのか、
「お前、あそこの秋ちゃんだけは駄目ですよ。あそこの家は違うんだから」
何が違うか私には解らなかった。後年になって、その意味が解ったが、封建時代の残骸であると思った。

今考えれば、私はどれ程、母に愛されたかわからない。
それだのに、あの母には何とも言い訳しようもない私は親不孝者だった。
私は十七才から日本のナンバー・ワンにならされたから、色気の付くのも遅かったのか、やたらにモヤモヤして家庭内暴力を揮った。道中差でやたら唐紙を切ったり、それこそ手のつけられない乱暴者であった。悪い、止めようと幾度も考えたが駄目だった。
その内シーズンになると、何も彼も忘れて、「走る」ことのみに没頭していった。

三年目に、学生大会（ユニバシァード）がドイツで行われ、私もその代表に選ばれた。

今度は、母からは絶対に金を貰わないで、自分で都合しようと考えて、母には、「小遣いは友人たちが集めてくれるから」と、断わった。しかし母は、五百円という大金を呉れた。当時、庭付きの一軒が建てられる額だった。

ところがあんな大言壮語したのに、ヨーロッパ遠征中小遣いが無くなって追加を母に頼んだ。ベルギー宛に頼んだのが、毎日転戦々々なので、金も転々として送料に取られて、手に入った時は、三分の一くらいになってしまった。尤も既に大半の旅を終えていたから金は必要なくなっていた。どこまでも親不孝な息子であった。その時はしかし、母に掛けた迷惑より、帰途の長い退屈なシベリア鉄道の日々を考えてゾッとした気持の方が強かった。二年前のシベリア鉄道を又々往復する憂欝の方が先に立ったのである。

母は私の走るのを見たことがない。

私は気が小さいから、走る苦しさを見せるのが嫌だったのだ。

後年になって母から、両親揃ってスタンドから私の走りを見た、と云われた。

それはユニバシァード前の第九回極東大会（東京）の時で、二日続けて日本記録を作った日だった。良い走りを見てくれたと、私は救われるような気がした。

締めくくり

「おっかさん、ごめんなさい」

御蔭で、孫どもは立派にやっています。

そろそろ私も、あの世とやらへ行く年が近づいて来ています。その日その日を神に守られて生きております。神はいつも私を庇ってくださる。そのうちそちらへ行ったら宜しく頼みます。

母は肺病で、私が傍へ行くと、うつるからと近寄せなかった。六十才であった。離れに寝ていて、看護婦が付き添っていた。

或る朝、誰も気付かぬ間に亡くなっていた。

母が眠っているとばかり思っていた看護婦は、「私が居ながら……申し訳ありません」

「眠るように…苦しまなくて……その方がかえって良かった……」

しかし私は死水が取ってやれなかったことを、心で悔やんだ。

……母の敷布団と畳の間から聖書が出てきた。

私は正に驚いた。そっと手にとってページを被いた。旧約なぞ訳もなにも分かりっこなかった、何も理解出来ない。

私はそっと母の枕の下の元の処に戻していた。

六十年目の卒業証書

戦争で疎開して、学校が焼けて、卒業式をやってもらえず、四十年を経て感激の卒業証書を手にしたという立派な美談とは程遠い、情けない話なのだ――

昭和九年三月二十五日、大隈大講堂で私達の卒業式が厳粛に行われた。ずぼらな私が卒業の日までハッキリ覚えているなんて、皆さん首を捻るだろうけれど、そこが肝心なところなのだが……とにかく、式が済んで講堂の階段を降りて来ると、学部は違ったが仲の良かった佐藤君に声を掛けられ、五、六名で銀座へ繰り出し卒業祝いの祝宴となった。深夜まで七八軒、カフエーや飲み屋を飲み歩き、ベロベロになった。

よく金があったと思うだろうが、佐藤君は社長の伜、ちゃんと社員か番頭か秘書か知らないが御供が付き従っていて、支払いは心配なし、私達は大学生最後の宵を破目を外して騒ぎ捲ったのである。

「お前、卒業したんだね」
「うん」
御殿場へ帰宅すると母が真っ先に聞いた。頼もしそうな顔で見るので、私はてれた。
「見せておくれよ、卒業証書」
「あれか……何処かへ行っちゃったよ、後でいいじゃないか」
「後でったってお前……貧乏しながら無理して大学卒業させたのに、卒業証書見せいてくれたって……面倒臭がる事じゃないだろ」
母は早、涙ぐんでいた。
お察しの通り、私はあの晩何処かの店に、筒に入った卒業証書を置き忘れてしまっていたのだ。
さすがに、俺は親不孝だなと思った。母から眼を反らして、「卒業するって疲れるもんだ」とかごまかして、畳の上に寝転んだ。
考えて見ると、卒業証書には全然、眼を通していなかった。形式的なことの嫌いな私は、いざとなつたら大学へ問い合わせれば、卒業したことは分かるじゃないかと、平気だったのである。

平成四年の今年の春――

御殿場の昔の陋屋に用事があって行ってきた長男が、

「こんな物が見つかったよ」

と云って、長細い古びた紙筒を私の前に置いた。

直ぐ判った、例の紛失した卒業証書だということは。

ハッとした。熱いものが込み上げた。これが昔の家にあったということは、おふくろが、母が、見ている、俺の卒業を確認してホッとしたに違いない。よかった。親不孝！私は自分にこの言葉を投げ付けた、何度目のことか数えきれなかったが。

恐らく佐藤君のところの番頭が、何処かの店から届いたのを御殿場へ送ってくれたのだろう。

卒業の日を私がハッキリ覚えてる筈だ、今年見たばっかりなのだから。卒業証書には、冒頭に、商学部　中島亥太郎。そして、本大学学則ニ拠リ前記学部学士試験ニ合格シタリ　因テ之ヲ証ス　昭和九年三月二十五日　早稲田大学総長　法学博士　田中穂積　と、記されていた。

六十年目の再会！それにしても迂闊極まる私。

大阪独身赴任と大原美術館

勿論、独身赴任と美術館は切り離して書くべきかも知れないが、私にとっては種々と関連があったので、一緒の題名にした――

東京オリンピックが開催されたのが、昭和三十九年十月であった。その九月末もぎりぎりの三十日の午前、突然、本社の総務部長が一枚の辞令を持って私の処にやって来た。

その時私は、横浜工場の責任者として六年勤めていた。神奈川の海岸に船の着ける岸壁を持った可成り広い敷地の工場だった。

辞令は、十月一日付で、大阪工場勤務を命ずという転勤命令だった。大概サラリーマンの移動はその前に、空気で解るのが普通である。それを同僚の総務部長は事前に何も知らせてくれず、友情の無い冷たい仕打ちだ、ひどい奴だと、その場で彼に文句をつけた。

我侭者の私は、時々大阪の工場へ出張したが、大阪という街は大嫌いであった。若し大阪転任なぞとなったら退職すると考えていた。工場の所在地が又大変な場所で、大阪の北に当る大正区―何も大正区が悪い処ではないが―私の工場は隣りが日立造船、積水化学、ちょっと離れて久保田鉄工、鶴町の海壁をもった処で、岸壁は大きな船が接岸出来るのは製品の船積が必要だったからだ。人の話に依ると、一平方粁に何砒という塵埃が降るとのこと、信じ難いが兎に角美しい処とは義理にも言えない処にある。

戦時中B29に爆撃されて跡形も無く焼かれ、やっと復興した。焼かれる前の大きなホトグラフを見た、上空から米空軍が撮ったもので、実に鮮明に写っていた。今更「コレジャ」敗けるわけだと思った。

そんな嫌な大阪へ、六人の子供を育てゝいた時期だったから、偉そうに転任になったら退職するなんて豪語は何処へやら、渋々と行かざるを得なかった。

辞令を貰ったのが九月末日、一日付で大阪工場の責任者。それは仕方ないとして我慢したが、腹が立ったのは、翌日の十月一日午後六時の、新幹線開業日の座席の予約と大阪のグランドホテルをリサーブしてあるとのこと、その上悪いことに、社長と常務が同行するようになっていた事だ。新幹線は止むを得ないがホテルは、私は断わった。そんな偉い人のボーイ迄やるのは、私の自尊心が許さなか

った。

十月一日に工場で挨拶を済ますと私は、翌日夕方の空便で今度は一人でのうのうと帰ることにした。

日航が十月一日からＤＣ７０１を新しく就航させたから、二日はその新しい航空機で帰れると喜んだのも束の間で、伊丹の空港でバッタリ再び社長と常務に出会い、悲しい想いをしながら羽田に着いた。女房が車で迎えに来ていて呉れ、車に乗って始めてホッとしたことを覚えている。

大阪の食い道楽とか云うが、私は食物の味には疎い。ただ魚以外なら私は何でも食べる。しかし先ず、うどんには驚いた。おつゆが口にすると味もそっけも無いようで、醤油をかけたくなった位だった。ほんとにそれをやった若い関東のサラリーマンが、うどん屋の親父に叱られたと聞いて、若い人の気持が分かるような気がした。

それが半年も過ぎないうちに、大阪のうどんのほんとに旨い味が解って、関東の黒いつゆが何だか馬鹿みたいに思われるようになった。現在斯うして関東に住んでいるが、うどんはやっぱり大阪だ、と懐かしい。

関東と関西には、種々異なった点は数え切れぬ程あるとのことだが、私は先ず

言葉遣いで工場の皆さんに言われたのは、「怒っている」「荒っぽい」であった。自分ではほんとに、普通に話している積りが、感じ悪くとられて、威張っているという陰口が私の耳に入った。私は一所懸命大阪弁を勉強して、自分でも可成り旨くなったと自負して、庶務課長に感想を聞くと、「あきまへん、言葉は同じでもトーンが全く違いますワ」と言われてがっかりした。

又、私が東京の本社から横浜工場へ転勤した時には、神奈川警察の署長さんが、わざわざ挨拶に来て呉れた。それが大阪へ行ったら、工場でスケジュールが出来ていて、警察署、消防署、職安等々に私は挨拶廻りをさせられ、全く以って嫌になった。

もう一っ、工場内では階級別が厳格で、課長さん、係長さん、工員さんの班長さん等の区別がはっきりし過ぎていて、私は馴染まなかった。

工場では、昼食に課長連中が会食するのが例となっていて、会議室で工員と同じ昼飯を食べるのだが、食事中も仕事の話で、私はがっかりした。一時間の休みぐらい自由にしてくれと言いたくて、遂に、「俺は明日から会食には出ない、皆は通例だから勝手に続けて呉れ」と云った。

私は男女工員さん達の中に無理矢理飛込み、男連中の野球で私が三振すると、皆手を叩いて喜んだ。女連中のバレーボールでも私のエラーに皆大喜びだった。

皆の中への仲間入りが目的だったが、バレーボールもほんとに難しいもんだと、つくづく知った。

その後直ぐに会食はお流れ。

従って、組合員からは苛められず、可成の対立で苦労したことも多々あったが、私が二年で本社へ転任すると決った時、労組の婦人青年部から反対運動が起り、ささやかな送別会も開いて呉れたのには感激した。

「俺を何時迄、阪チョン（大阪独身）で居らせるつもりか、それなら良い女でも探してくれゝばネ」と、冗談を言って、心では万歳を叫んで、自宅へ舞い戻った。

転任の時には、幾許かの手当が出る。しかし大阪住まいのための冷蔵庫その他種々の生活用品を揃えるにも足りず、あの暑い夏の日々、コンクリートの建物の中で我慢し通した。エア・コンなぞとても高くて手が出ず、余りの暑さに、アパートの車庫から車を出し、夜道を六甲山までドライブし、頂上に着くとこれが又寒くて、屋台のラーメンを食べたこともあった。

東京へ帰る時は、大阪行きとは反対に転任手当は丸々残って、儲かったような気がした。しかし通算してみると、やっぱり転任は金がかゝり、家族と二世帯では出費が多いのは仕方がない。

仕事の都合上、電話は部屋に絶対必要で、車庫代も高く、台所があってもお茶

を自分で入れて呑んだこともない怠け者で、外食で苦労した。

週一度の日曜日には、青いものに接したくて車で郊外に出て、京都、奈良、伊勢、丹後の宮津等々、方々へ行ったのは現在でも良い旅をしたと、有難く思っている。殊に法隆寺、京都の御所なぞは、よかったナと思う。

まだまだ大阪の良いとこや、その反面なぞ一杯あるが、もう一っだけ。

大阪は東京に比べて道路が狭い。堂島の並木通り以外は狭い道を車が雑踏していて、走り難い。

或る日、工場から帰宅の途中、前を走っていた府警のパトカーのブレーキランプが灯かない。危なくて仕方ないので、私の馬鹿さが出て、そのパトカーを左に寄せて停車させ、

「ブレーキランプが故障しているぞ」と、云ったら、

「わかってんのや」と、云ったので、私は怒って、

「俺の車だったらお前ら、俺を捉まえて反則金を取るだろう、故障を知ってるなら、左側をそろそろ走れ」と文句をつけたらお巡りさん、口惜しそうに何も云わずに左側を走っていった。

工場でその話をしたら、「とんでもない」と、言われた。

大阪は東京と違って大きな役所が少ないので、役人が大体威張っているのだから、府警の出方はあれが普通だと云うのだ。だから気を付けないと……と云われ「品川ナンバー」を覚えられていて、眼を付けられるといけないと、私は安全運転をした。

一度、大正橋を右折する時、前の大きなトラックで信号が見えなかった＝事実は赤を知っていて＝と、捉まったお巡りに言い訳した。私は付け加えて、

「東京から初めてゞ道が分からず、戸惑ってつい赤に気付かず済みません」

と、毎日通い馴れた道なのに大嘘ついた。ところが、このお巡りさん凄く良い人だった。わざわざ地図を書いて呉れて、「気つけてゆきなはれ」と親切な言葉、さすがの私も、俺は悪い奴だと自分で思った。

又赤信号と知ってゝ無視し、捉まった時は、「東京でも大阪でも赤は止まれや」と、怒られたが、品川ナンバーのお陰で助かった。

さて愈々、大原美術館のことを書こう。

実は元々芸術的センスのない私は、絵も音楽も分からず（之は現在でも）大原美術館なぞ全く知らず、或る日車で、西へ向ってあてどなく国道2号線を走っていった。

私は大阪より余り東へドライブするのは避けた。それは自分の家へ帰りたくなるからだ。伊勢へ行った時、大阪へ帰るのが嫌になって東に向って東京の自宅へ帰ってしまった。翌日、大阪の工場へ電話で、「用事が出来たので上京し、本社に行く」と、嘘を云って、所属のゴルフ場で一日プレーして、大阪へ帰ったこともあった。

閑話休題、2号線を西に走っていたが、暑くてたまらず休んだ処が、倉敷であった。大原美術館の案内が出ているのを見て、行く気になった。

美しい処で、堀割の端に確か柳の木があり、黒塗の土蔵が並んでいた。見物の人も少なく、車は道路へ問題なく駐車しておけた。（現在状況では想像もつくまい）ブラリ歩いて美術館を見付け、なにがしかの入場料を払って中へ入った。

私の無智と恥を告白しなければならない。「ミレーの晩鐘」唯一っだけは知っていたが、その絵を見て、次々と行くと「ドーバー海峡」の絵も、ミレーだと分つて、驚くと共に如何に無学であるか、自分に深く恥じ入った。恥を晒してしまえば、「ミレーの晩鐘」をカレンダーか何かで見たのだろうか、私はあの農夫婦はミレーという場所で祈っていると解釈していたのだ。だから「ドーパー海峡」を見て、ミレーってのは画家の名前だと判り、赤面の至りだったのだ。

それ以来、多少絵の本を見たり、読んだり、ＮＨＫ日曜8時からの3チャンネ

ルで教わって、ゴッホ、ルノアール、ゴーギャン、モネ等々少し勉強したつもり。従って、音楽もワグナー、ショパン、シューベルト、ヴェートウベン外を少し知った。

音楽は、少年の頃から、親に言われて諦めた。それは赤ん坊の時、「馬鹿におとなしいナ」と、両親が座敷にいる私を見て吃驚り、私は自分の汚物を口に入れていたのだそうだ。だから、この児は音楽は駄目だと、はっきり親にダメを押されて、その気になって私もそれを信じていた。

現代風の幼児教育で、親が私を煽てゝ、「お前は音楽の才能があるかも」と、言って呉れていたら良かったのに。ペリコモ、カーペンター、シナトラ、ナット・キング、ごく最近六十二才で亡くなったサミー・ジュニア等々、彼等の歌を私は可成り原語で歌えるし、自身でリズムは確かだと自負している位だもの。

扨て大原美術館で私は、恋をした。勿論私一人の片恋であったが。

館内でフト素晴らしい美人の尼さんを見た。絵の前に立ってジッと見詰めるその人の気品、気高さ、高貴な方だなと思った。年齢は確か三十過ぎのようで、少し年上の尼さんが手に荷物を抱えて、ちょっと退って後ろに付いているので、一目でお供だと判った。私は絵も見ないで、気付かれないように彼女を眺めながら場内を付いて廻って歩いた。誰か皇族の出の方ではないかしらと、余計な事を考

えた。その方が見終わって出て行かれるその後姿をジッと私は見送っていた。
私は改めて絵を見始めたが、どの絵も面白くもなく、見つづける気がなくなった。
美術館の近くの「グレコ」と云う店でコーヒーを飲み、ぼんやりしていた。
喫茶店を出ると、土産物屋で、あの近在で穫れる畳表になる葦のような、蘭草で作ったハイカラな女用帽子を女房にと五百円で買った。元来私はケチで、何時の日だったか志摩へドライブした時、真珠の首飾を買って女房にやろうと思い、二千円位のものを二万円だぞと恩に着せてやろうと考え、どうせ分かりっこないと思ったが、やっぱり良心に咎めて結局買わなかったという訳。それに比べれば安物とは云え、今回は上出来だった。
余談は兎も角、私が「タイトル」を「大原美術館」とした理由が解ったことゝ思う。

人間、人生、幸不幸、種々とあるが、ゴッホの最後の絵を百十何億円で競り落したのが日本人であると聞いて、私は悲しくなった。金々金、悪いことをして迄そんなに金が欲しいのか？こちらは貧乏で金に縁はないが、食うに困ることがない程度で充分だと思っている。負け惜しみかもしれないが。

この現在の世相では、今に日本は亡びると思う。

今に発展途上国以下になる。金はＧＮＰが世界二位と云っても、ほんとのデモクラシーが身についていないのではないか？そう云う私自身を含めて。何んとなく安心立命の境地に居て、何んとなく毎日を過ごしていることの出来る人がどのくらい居るか、明治に生まれた人間にはこんな気持、解るに違いない。

幾人の日本人が真に幸せか！？そうならないことを希っている。

四百米競走

中島亥太郎



日本陸上競技聯盟編
陸上競技　競走篇

吉岡　隆徳
中島亥太郎
藤枝　昭英
津田晴一郎
北本　正路
加賀　一郎
麻生　武治
藤田　辰三
福井　行雄

昭和九年六月一日発行
三省堂

目次

資質……七七
概念……七八
方法……八三
策戰……八七
競走前の本格的練習……九八
練習過度であることを自覺した時……一〇三

四百米競走

【資　質】

四百米の走者にはどんな體格の人が最も適して居るかと云ふと、身體の餘り堅くない、しなやかなどちらかと云へばすんなりした身長（せい）の高い一米七〇以上の丈（たけ）で、其の上相當體重のある人が良い様に考へられる。細つそりした身長のヒヨロ長い人や、駄肉のあるぼて〳〵して肥つて居る人などは餘り感心が出來ない。かうした人も練習の如何によつては或程度迄の進歩はするが、大成することは到底おぼつかない。

私の今までの經驗に依ると、四百米には身體の適、不適と云ふことは左程問題でなく、寧ろ精神的要素の一である勝氣であるかないかと云ふことの方が、遙に重大であると思ふ。勝氣な走者であると後半の苦しい競走を半ば氣で以て押し通して行き、最後の一歩まで頑張り通す

ことが出來るが、これに反し弱氣な走者であると中途でまゐる樣な結果となる。最後迄の頑張り、耐久力は心臟や肺が強くありさへすれば練習次第に依つて如何樣にも養成し得るが、それは決して樂なものではなく、餘程の忍耐力がなければ、一流の競技者になることは出來ない。

【概　念】

四百米競走には中距離走者の有する耐久力が必要で、此の耐久力は前述の如く內臟の諸器官が丈夫であれば、自分の練習努力次第で如何やうにも養成し得るが、それよりももつと大切なものは、短距離走者の有する速力である。最後の一歩まで、自分の全速力を持續して行くことが出來るならば、それが一番良いと思ふ。

速度が如何に必要であるかといふ實例までに、私が初めて四百米を走つた時の經驗を話してみよう。早稻田大學へ入つた最初の年の早慶戰に私は慶應の岡田君と走つたが、其の時私は四百米の走法等は全然知らなかつたので、初めから二百米の調子で最後迄走り通してしまつた。處がこれが大變な好成績で、今から考へて見ると實に無茶な走法だつたけれども、これは最後

四百米競走

迄矩距離の速度を持續し得たがためにかうした良好な成績を産み得たのだと私は考へて居る。

四百米の記錄が更新されてゐる今日、純然たる短距離走者から入って來た人の方が、從來の中距離から來た走者よりも多く成功してゐるが、かうした傾向を見ても四百米には耐久力ばかりでは駄目で、これに迅速な速度が伴はなければいけないと云ふことがはつきりと判る。四百米を走る際には、全走程を區分して大體の目標を附け、各區間に於ける走調を定める事が必要である。例へば最初の三百米を全速力で走ればそこで力が盡き、殘りの百米に於ける速力に變化を生ずるから、力の配分を考へ、四百米に適する樣、速度と力の配分を習得しなければならない。

私は四百米を大體次の樣に三つに分けて走つてゐる。初めを全速力で走り、次を大股疾走で、最後を又全速力で走る樣にして居る。規則上から云へば、四百米は區劃された走格を走らなければならないことになつてゐるが、時によると區劃されない自由な走路を走らなければならない場合もあるので、その際一番注意すべきことは、相手に卷き込まれない樣に走ることで、それが爲めにはゴチャ〳〵に揉まれない樣、最初から力を惜しまず邪魔のない有利な位置を得ること

が必要だと思ふ。一番先頭に出てから力を落しても大概の走者は其儘能く隨いて來るものだと考へるが、此の場合最後に行って力走する力が出るやうに精力を充分殘して置くことが肝要である。夫れには第一に全力疾走（スプリント）が必要で、若し全力疾走（スプリント）の力が不充分だと、敢然と先頭に立つて走る丈けの力も自信もなくなり、從つて他の走者を押へ様として無理に力を浪費する様になり、結局不經濟な走り方をすることとなる。全力疾走（スプリント）さへ完全であれば、樂に先頭に立つて他の走者から邪魔されることもなく走り、戰を有利に導く信念を持つことが出來る。以上は私の體驗であり且つ又信條とするところで、全力疾走（スプリント）を利用して成るべく走路の內側を走るのが最も理想である。

若し走路が區劃されて居る場合、外側の走路を占めた時には速度の目標がないから、自分の具へてゐる全力疾走（スプリント）を惜まず思ひ切り走ればよい。初めから不安に驅られすぎて、全力を出し過ぎたり、又は自重しすぎたりすることは大の禁物で、自分の習得した調子通り相手が早く走らうと遲く走らうと少しも意に介せず、自分の走調を亂さずに走り得るだけの工夫と研究とを日頃から積んでおかなければいけない。これと反對に、若し內側の走格を占めた場合には、

內側の走路で走ると云ふ觀念を去つて、自分の調子を失はない樣に走ることが必要である。かう云った具合に區劃走路を走る時には、走路の內側外側の觀念に捕はれずに、且つ又外側の走路を走る走者を目標にして走らず、飽く迄も自分獨特の調子を亂さない樣にして走ることが肝要である。

豫選の場合にあまり速力をおとして走ることは感心出來ない。豫選を通過するに充分なだけの速力で走れば結構で、徒らに無理に頑張る必要は少しもない。自分の走り得る實力を思ふ存分使つて走つてゐれば決して間違ひや違算などを生ずるものでないが、他の走者の速度を目標にして走ると、往々豫期に反する不覺を招いたり、或は苦戰に陷入つたりする結果を生じ易いから、飽くまでも自分の力を信じて自分の走調で走る樣に努めなければいけない。

區劃走路（セパレートコース）の曲線走路（コーナー）を走る時、最も內側の走路では速度を殺（そ）がれぬ限度で出來るだけ內側を走る樣に努力しなければならないが、反對に外側の走路では、區劃線の內側上を走る疾走型であれば結構である。

自由走路（オープンコース）、區劃走路（セパレートコース）の何れを問はず、常に距離、速度を誤たぬだけの心掛があつて欲しい。

若し自由走路（オープンコース）で最も外側の走路を抽きあてた時には、曲線走路（コーナー）で最も内側を走り得る様、最外側から斜に最も内側を目標にして穴を掘り出発する。反對に自由走路（オープンコース）で内側を走る場合には、外側から斜に内側へ突進して來る走者のあることを豫期して、全力疾走（スプリント）を有效に利用し自分の走る前面を遮られぬ様、懸命の努力を拂はなければいけない。出發線（スタートライン）から曲線走路（コーナー）までの距離が短ければ短い程、全力疾走（スプリント）を役立たせないと他の走者に「ポケットイン」される機會が多いから、たとへ曲線（コーナー）走路までの距離が長くても力を空費しない範圍で、走り易い有利な位置を先占すべく力走するのが、最も肝要な定石である



第十回オリムピック四百米決勝

カーがオリムピック記録と世界記録を樹立した瞬間である。カーのフィニッシュは何等技巧なしにスプリントの儘で決勝線を走り抜けてゐる。腕の動作も脚の動作も四百米のフィニッシュには適當なものである。慾を謂へば顎が引き擧げられて居る。イーストマンは一言して謂へば勝利に對する執拗さに缺けて居る。闘志の缺乏が、疾走型の上に緊張味を無くして居る。この疾走型で特に氣付いた點は地上におかれた足裏が全部着いて居る點である。四百米の最後の數歩と雖も避く可き動作である。

と私は考へる。若しポケツトインされた時には、徒に周章(あはて)ず冷静に戰況を判斷し、直ちに苦境を脫することに努めないで、好機(チヤンス)を窺ひポケツトインより脫出することが必要で、其の際徒に精神を疲勞させない樣落ちついて動作しなければいけない。

【方　法】

私は最初の五十米から、約七十米位迄は、百米を走る時と同じ樣な調子で、殆ど全力疾走(スプリント)で走る。するとこれに依つて加速度的な速力が附いて來るのでこの走調(ペース)を續け、それから少し調子を落して、次の二百米を半分宛に分け、初めの半分は腕を高く振り、後の半分は成るべく腕を振らない樣にして走る。

此の走法は中距離走者として有名な獨逸のペルツアに聞いたので、某後競技毎に私が此走法を用ひた結果は、非常に良好で、既に極東大會で試驗濟となつてゐる走法である。

脚は百米の時と同じ動作をとり、踵を地面に附けないで爪先で走る。と云つても全然爪先丈けで走るのではなく、靴底の靴釘(スパイク)つまり六本なら六本の靴釘(スパイク)を走路におしつける樣にして歩巾

も意識的に狹くせず、伸しもしない走型をとる。

全力疾走（スプリント）から中間疾走に移る瞬間、走法に急に目立つた變化を興べてはならないと思ふ。自然に速力を變へる樣にして走り續けなければいけないが、此の自然的に速力を變へる走法は中中難かしいから、練習時に當つて其の積りで大いに練習を積んで置く必要がある。此の際力を抜いた時でも速力は落さない調子で走る、と云つた極く輕い氣持で疾走すれば幾分歩巾が廣くなる。この走法を續けて行つて最後を又頑張るので、此の場合歩巾を前よりも幾分狹める樣にしなければいけない。然しこれは別に無理に狹めなくてもひとりでに狹まつて来るから、中間疾走は極く樂な調子で走つてゐればよい。かう云つた具合に中間疾走の走型は歩巾が廣くなり腕が高く前かゞみになり、寧ろ少し抱へ氣味になつて來るが、腕を決して大きく振らずに腰と上體で以て走つて行く。

最初の五十米、七十米では腕を強く振つて走るけれども、其の次の中間疾走では腕を強く振らずに腰と上體で以て走る、樂な走型をとつて進み、最後には此の中間疾走でためて置いた精力を一時に出して死者狂ひの力走を助けるやうにする。

腕の振方は走型に對して相當重要な一要素であるから、平素正しい腕の振方を練習して置く必要がある。短距離疾走の場合には、普通肩を張らずに上膊を中心とし、下膊を強く振るが、中間疾走の場合には、此の方法は私だけかも知れないが肘から下の方を強く振り肩から走るので、最後は肘が乘る様な形になる。手を固く握りしめて拳骨をこしらへる人もあるが、手は半開き位にして自由意志に委して置いた方が一番良い様に私は考へる。

二百米の時には、全速力に等しい相當な大股疾走（ストライディング）で走らなければならないと同様、四百米も亦相當速力のある大股疾走（ストライディング）で疾走しなければならない。四百米は二百米より競走の距離が長くなるから、それだけ速度を持續する時間も長くなり又耐久力も多く要するので、大股疾走（ストライディング）の歩巾も二百米の大股疾走（ストライディング）の歩巾より幾分長くなる。

此の長い歩巾を得るためには、下肢部に力を入れないで、脚を意識的に振り動かし、脚へ體重を無理にかけない方がよいと私は考へる。地面を強く蹴りつけた脚と足は反撥的に膝が後から前の方へ高く引き上げられ下肢は幾分伸びて自然に前方へ落ちる。太股が前へ高く運ばれ下肢も亦太股の正しい運動によって前に運ばれるのでなくては、脚の正しい動作と云ふことは出

來ない。正しい太股と下肢の動作が行はれてこそ、正しい歩巾が生れるので、太股の正しい動作から生れる力を巧みに利用し、徒らに下肢を振り且つ伸した力を利用すべきではない。太股の下肢で地面を押しつけ前に出る様に努めなければいけない。股と膝との力を一致させ、地面を蹴らずにぐつと推し、反撥力を巧みに利用して牽き擧げる動作と一致さすことが必要である。

腕の動作と脚の動作とが、互に密接な關係を有してゐることは今更言を俟たぬ處で、肘が後方へ高く牽かれた瞬間、太股は最も高く前方へ牽き上げられて居なければならない。

疾走中の身體を前に倒す程度は、上體を單に折り曲げるばかりでなく、全身を恰も一本の棒の如く考へ、直立の姿勢の儘腰を中心にして身體を前へ倒す。これが正しい前傾で、川發直後は百米、二百米の時と同じ前傾の角度を保つて走り次第に速力を增してゆく。出發から七十米位迄は七十度の前傾を保ち乍ら全力疾走を持續して行く様に懸命に頑張るから、相當深い前傾を保つて走ることになる。中間疾走に移る時、心持前傾を淺くするため、足の動作は自然的に深い曲折で地面を蹴ることが出來なくなり、脚と下肢が比較的に淺く曲折するから、從つて歩巾が廣くなり樂な走型に變化して行く。

最後の力走には再び身體の前傾を意識的に深くするが、此の際前傾を極端にしたり、又は急激にしたりすると却つて失敗に終る様な結果を生ずるから充分に注意しなければいけない。

中間疾走から最後の全力疾走（スプリント）に移るときは、圓滑さを失はない様にして次第に前傾を深めて行くのが祕訣である。私の見るところでは、獨逸の選手は腰を中心にして前傾を深めたり淺くしたりして行くが、私自身の最後の力走では、前傾を意識的に深め、腰を上下に動搖させない様にして身體を推進させて行く。腰を出來るだけ高く運び、獨逸の選手の如く腰を中心にして前傾を活用して行くのが最も理想であるが、後半の力走ではかうした技巧を生かして行くことは到底至難であると私は考へて居る。疾走中頭は樂に保ち眼は上目を使ふ様にして走り、最後の力走にかゝつた時に始めてゴールを見る様にすればよい。

疾走を續けて居る間、呼吸のことは全然考へないで自然にまかせておいた方がよく、自分はスパイクの全面を使はずに六本の中爪先きのスパイクを使ふ様にして居る。

【策　戰】

自由走路（オープンコース）の場合には先づ參加人員數の多寡に據つて、策戰をたてねばならない。自由走路（オープンコース）で走者の多い時には出發に速力を出して、成る可く距離を短く走ることの出來る內側を先占し、先頭に立つて走ることが有利な作戰であると私は考へる。

若し他の走者にポケツトインされた時には、決して周章（あは）てずに落ち付いて出來るだけ早く機會を捕へてポケツトより脫出し、全力をあげて先頭の位置を奪ひ返す樣に努力しなければいけない。先頭に立つことは總てに有利で戰を樂に進めて行くことが出來るから、幸に先頭に立ち得た場合には、氣を樂にもつて相手は最後に速力が鈍り弱くなると云ふことを念頭に置き、自分の出し得る力、自分の出し得る速力で、果敢に速く走つた方が成功する率が多い。走路（コース）の距離の大小にも據るが、一體に一周二百米位な小さいトラックでは先頭に立つことが殆ど決定的な勝利をもたらす定石である。雨が降つて走路が軟くなつてゐたり、又は竪かつたりする時も同じ覺悟と同じ策戰とで走ることが必要である。

競走相手の實力が自分よりすぐれて強い場合には、豫想した距離、場所に達した時、豫め研究しておいた相手の弱點に乘じ力走して超走し、相手をおさへ、相手の強い所、長所では急迫

されても、必死の努力で持ち耐へる様に頑張ることが時宜を得た策戰である。多少自分の實力が相手より優ることを感じて居ても、決して逃げ込む戰法に出てはいけない。此の戰法は結局不利な策戰で最後迄完走することが出來ない。假令最後迄完走し得る自身があつても、無理な策戰や奇策は避け前述の如き定石で進む方が確實であると考へる。

對抗競走にはペースメーカーが、故意に走調（ペース）を亂したりするので相當警戒を要するが、ペースメーカーの作り出す走調が正しいかどうかを冷靜に、卽座に判斷して敵の作戰に乘ぜられぬ樣自分の走調（ペース）を亂さずに完走することが肝要である。ペースメーカーの局部的猪突に幻惑（まよは）されず、且つ又正しい力の配分を誤たずに、自己の走調（ペース）で完走し得るだけの自信がなければ意外の敗戰を經驗しなければならない。これによつてみても自分の走調（ペース）を充分に知り且つ又それに自信を持つことが絕對に必要であるから、練習時に當つて充分自分の走調（ペース）を知る樣に努めなければいけない。

區劃走路（セパレートコース）の場合には勿論自由走路（オープンコース）の樣にポケツトインされる心配はないが、然し目標に却つて惑（まど）はされだまされ易い傾向が多いから、飽くまでも獨特の走調（ペース）を以て戰を進めて行かねばな

らないと思ふ。力の配分を先づ三區間に配分して、最初の七十米位と最後の百米位を相當に頑張り、中の區間を力の經濟的な中間疾走で完走することに努める。若し素晴らしい記錄を作らうといふ野心に燃えて居る時は、中間疾走の距離を短くし頑張る距離を長くすればよい。

私は練習の時何時も三百米の記錄（レコード）を標準にして競走の時と同じ速度で四百米を力走してみる。そして前半の二百米の速度記錄を參考にし基準にして、其調子を充分に體得し、競走の時にはそれと同じ調子で滑り出して行く。私は自分の持つ正しい力の配分、走調（ペース）で全力を盡して戰ひ、たとへ不幸にして敗れても實力の差であると考へ、更に一層努力發奮して次の機會を持つことにしてゐる。

私は二百米を走る大體の標準を迅く強く走る場合には二十二秒八位、緩り走る場合には二十五秒半位で走ることにきめて居る、早過ぎて最後迄完走し得ない不安が伴ふ時には、幾分速度を調節する必要がある。

初心者や經驗の淺い走者は自分の走調（ペース）が充分に分らないから、矢張り練習中には經驗の深い走者が伴走して走調（ペース）や力の配分を教へ習得させる方法が最も良い。

内側の走路を疾走する時相手の走者の走調（ペース）に惑はされずに、最後迄自力で疾走することが必要であるが、中には曲線走路（コーナー）から最後の直線走路（ストレート）へかゝると、自分の實力をも考へず、又正しい走調（ペース）をも守らずに先頭へ飛び出して、機先を制し様と考へたりする走者があるが、これは自分の走調（ペース）を亂し力の配分に間違ひを起させる原因となるばかりで何等の效もない。

外側の走路を占めた時には餘程注意しないと、走路順に據る差のため内側の走者よりも遙か先頭にあると考へ違ひして速度を調節し過ぎて失敗することがある。又内側の走路の走者に絶えず追走を受ける形になり、神經過敏になり易いが、それに氣を取られると、或は前半を暴走したり或は速度を落し過ぎたりして思はぬ不覺をとる様になる。此の際は自分の走調（ペース）と力量に飽くまでも信頼して走らなければならない。

昨夏羅府で開かれたオリムピック大會では競技場の走路が、一周四百米、二つの曲線走路が二百二十米、二つの直線路が百八十米となつてゐたから、最後の直線走路九十米は短く感ぜられた。此に反し神宮競技場の四百米競走に於ける直線路は百五十米もあるから、曲線走路を終へて、直線走路に入った瞬間、長いなと感ずる。最後の直線走路は距離が短い方が相當疲勞を

感じて居るだけに氣持の上にも走り易いが、百米位が一番良い距離だと思ふ。直線走路に入るや直ちに力走に移れと警告や忠言を受けることもあるが、最後の直線走路が百五十米以上もあると、氣力と體力が中々持続し難いので直ちに力走に移ることが出來難い。然し最後の直線走路が百米位であると、最後の力走を完走し得ることが多くなる様な氣がすると同時に、力走し甲斐があつて有終の美を發揮することが出來ると私は考へる。

四百米走者には、耐久力を武器とする中距離から入つて來た者と、速力を唯一の武器とする純然たる短距離から入つて來た者と、二通りあるが、耐久力を主とする中距離走者の作戰と疾走を武器とする短距離走者の作戰とは自ら異つたものでなければならない。耐久力を武器とする中距離型の走者は、出發から頑張つて短距離型の走者に大差のない程度に、遲れない様に追走して行く方が良いと思ふ。最後迄頑張つても耐久力があるから充分に走り得るといふ自信をもつて飽く迄も追走を試みるべきである。

中間疾走の距離は、成るべく短くして戰を進める方が正しい道であり又有利である。これに反して私の様な短距離型の走者は、全力疾走（スプリント）で出發から最後迄完走する心持で出發を最後の力

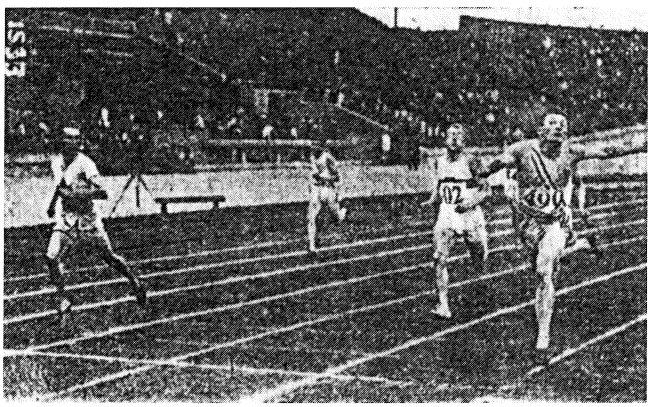
走に對してする方がよい。そして決して疲勞し切らぬと考へて力走又力走する方が有效である。

練習方法も、作戰と同じで、走者の特徴、體質等に應じて當然其の根本が樣々に違つて來るので一樣に云ふことは出來ないが、大體に於て中距離型走者の練習法と短距離型走者の練習法とに大別することが出來る。耐久力ある中距離型走者の練習の主眼點は「スプリント」を養成することで、百米、二百米、三百米の矩距離の練習によつて「スプリント」を具へることが先づ第一の必要條件とされてゐる。

短距離の走者は、「スプリント」には事を缺かさないので、四百米競走に必要な耐久力を養成して、最後迄頑張り通すことが出來るように練習方針を立てることが大切である。

練習は、二月、三月頃からぼつ〳〵始めて走ると云ふことを忘れない程度に、極く樂な仲々した氣持で、割合に長いと思はれる距維を走り、呼吸器、內臟、筋肉等の準備時期を與へてやる方が良い。

距離としては二哩か三哩が適當で、最初から速度を早めたり、強く走ることは禁物で、苦痛



米国のバーブッチが捨身のフイニシュを敢行して加奈陀のボール選手のゴール前の有利さを逆轉させた息づまる瞬間である。ボールには確かに油斷があつた。側見をして居ることが如實に示されて居る。決勝線へ達したから力走から解放されたと想ふな。眞の決勝線はテイプを張られた決勝線より十米前方にあることを實際に教へられた寫眞である。獨逸のブユヒナーも立派な走法を示してゐるが視線はテイプに注がるべきである。

を感ぜぬ程度で走り、若し苦しくなつたら休み、又歩行し、苦痛が去れば走り出すといふ程度の、極く呑氣な氣分を以て、最初の練習を始めるのがよい。其の代り元氣が無いとかコンデーションが悪いとか感じた時でも、努めて走り練習を中止しないことが何よりも大切である。若しトラックが使用に堪へない様な場合には、斷郊競走の練習も結構だが、少々無理だと思はれる走路狀態でも、トラックが使へたらトラックを使用して練習した方が遙に效果的である。走ることばかりに拘泥せず、圓盤投、砲丸投の投擲練習

も休憩時間中に加へ、四六時中身體を動かす程度の伸ゝした練習時間を送る様にし、其の練習の所要時間も一時間半位で充分である。身體の關節、筋肉の均整、柔軟強化の準備練習は、毎日實施しなくても良いと私は考へてゐる。實施するとすれば、一週間に四日位が適當で、又隔日に實施しても良い。其の際自分の缺點を矯正し良習慣を造り出す工夫を眞劍に研究する必要がある。

準備運動の重大要素の一つである柔軟體操はどんなことがあつても缺かしてはいけない。過去の自分の缺點と想はれる弱點と指摘されてゐる惡い點を矯正する氣持で體操をやらなければいけない。脚の引き上げ方の足りなかつた者は、此の柔軟體操に依つて其の缺點を補ひ、腕の動作の惡い者は正しい振り方に矯正し得る樣努力しなければいけない。

私の基本練習は相當激しいと思はれる程度の練習分量を實行することだが、然し猛烈だからだと云つても決して練習過度に陷る樣な激しい練習分量ではない。其の分量に依つて身心は疲勞を感ずるが、意志の力で總てを解決して行く。そして競技前までかうした激しい練習を續けて行く。

一日の練習分量を私は大體次の様に實行して居る。

スタートを十回位、相當激しいと思はれる位のスタート練習を繰り返し練習する。百米と同じ様な調子で行ひ、短距離走者が走る距離よりも長い距離を走る。短距離走者と一緒にスタートし、短距離走者が七十米邊で練習をやめても百米位迄走り續け、中間疾走に移つた時の疾走型を保つ練習を繰り返す、其の後の練習分量は、其の日の氣持に委せて居る。

今日は三百米なら三百米、百五十米なら百五十米と其の日の氣持で走り、回數は二回と定めて居る。三百米を走つて見ようといふ氣持がある時には、速度の調子を心持落して疾走し暫く休憩の後百五十米を全力疾走（スプリント）で走つてみる。三百米を走る時には、必ず中間疾走の型の習得を練習するのであるから、最初から百五十米位迄全力疾走（スプリント）で走つてみる。練習の分量は今日三百米を二回練習すれば、明日は全力疾走（スプリント）を養成する爲短い距離を全力疾走（スプリント）で走つてみると云ふ具合に、大體、短距離と長い距離とを交互に練習する。時には千米の長距離を走る事もある。

補助運動に體操を試みることは絶對的に必要であるが、我國の走者の多くはとかく此の體操

を馬鹿にしてゐる者が多い様だが、世界的に著名な選手の多くは體操の訓練を缺かしてゐない。體操を早朝に行ふと思つても中々出來るものではないから、走圈（トラック）へ出る際多量と思はれる程の分量ある體操を思ひ切つて試みるとよい。かうした補助運動の後に行はれる準備運動の際、大半の走者が間の伸びた緩走の型で走つてゐるが、あのユツクリ走る調子の準備運動は不適當で寧ろ中止した方が良いと思ふ。もつと總ての調子が迅速である様な速度のある準備運動を行ひ、身體の狀態を潑溂たる元氣充滿の狀況に導いて置くことが必要で、發汗作用のあつた後暫時休憩をとりそれから出發（スタート）練習に着手する。

出發練習は必ずしも此の時でなければならないと云ふことはなく、三百米の練習後に試みることもある。出發練習で發足し其の儘中間疾走の型を修得する練習を適時繰り返すことも有效で又時には出發練習後百五十米位を全力疾走（スプリント）で走り練習を打ち切ることもある。

正式練習後に整理運動を試みることがあるが、これは練習時間が長すぎたり或は分量が多すぎたりすると、それに伴つて疲勞もひどくなるから、出來得る時と否（しか）らざる時とある。

私は元來、整理運動に餘り重きを置いてゐないが、外國選手の中にも此の整理運動を實施し

て居ないものを往々見受ける。若し此の運動が走者にとつて必然性のものであるならば、走者が一様に試みなければならない筈だが、其の人の考に據つて違ふのではなからうか。

尙準備運動に就いて一言注意しときたいことは相當急激な練習、迅速な諸動作を以て、準備運動とすることで、身體に緊張味と潑溂味とを與へるためいきなり速く走ることは非常に效果的だと考へる。

【競走前の本格的練習】

競走前の本格的練習は基本練習より幾分分量を輕くして試みる。例へば三百米とか、五百米とかの長い距離を迅速な速度で走るといふ無理な練習を避ける。私は以前には、隔日に五百米、三百米の距離を速い速度で走る練習をしたが、現在では一週間に二回位の程度で本格的練習を濟ませ、長い距離を速く走ることを避けて居る。主としてスプリントを付ける練習に重きを置いてゐるが身體を樂にして無理することを避けて居る。

初心者が四百米を完走し得るには、今日は三百米を走り其の次の日は三百十米まで延長して

走り、其の翌日は三百三十米迄走ると云つた具合に順次に距離を延長して走れば、容易く四百米まで進み得る様に考へる者もあるが、私はかうした練習方法には感心出來ない。若し全力疾走で、三百米を確實に走り得る實力があり又確信があれば、四百米は完全に心配せず走り得る實力が既に作り上げられてゐるとの自信を懐いても良いと私は思ふ。

私は三百米を全力疾走で走り、練習記録の向上をはかり、他方に五百米位の練習を行ふと云ふ二つの距離の練習を基本としないで、昨年からは四百、三百、五百米の三つの違つた距離の練習を標準として練習して居る。

此の三段の練習法は私が或る競技者の練習法を聞いて、ヒントを得たもので、果してそれが良いかどうかは確信を持てぬが、私は當分此の練習法を繼續して其の結果を待つてみようと思つてゐる。

本格的の練習を始めて後、愈〻競技會が接近して來ると、練習の分量を漸減するが、此の時期は競技會の約一週間前頃がよい。一週間前は本格的の練習を濟ませ身體の調子を整へ、ぐつと分量と調子とを落して心静かに競技の來る日を待つのがよい。

試合が一日で終了する日の競技會と二日に渉る競技會とでは、違った休息をする。競技が土曜日、日曜日と云ふ具合に二日に渉るときには、其の前日の金曜日を休み、日曜日一日で終る様な場合には、金曜日を休み、さうして土曜日には輕く練習をする。然し雨天とか暴風とか天候の關係で、文字通りにゆかない場合もあるから、果してこれが良いかどうかは確信が持てない。雨の降つた日は、大體に於て練習は中止する方がよい。

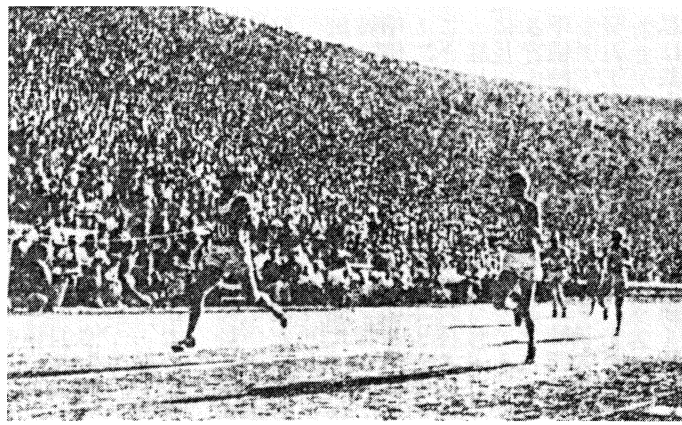
日曜日は休養するのを原則としてゐるが、基本練習時期には日曜も休まず練習を續け、正式の練習に入つて始めて一週間に一度の休養を攝る。

準備練習期は一ヶ月位で切り上げる。私は基本練習を二ヶ月も續けてやれば相當に自信を持つことが出來るが、普通の競技者には此位の日時で中々確信が生れて來るものではないから、更に長い總體の練習期が必要である。

準備練習期がニヶ月、基本練習期がニヶ月、其の上本格的練習期が一ヶ月位と、まあかうした努力工夫の日時を費せば、先づ正しい練習を積んだものと云ふことが出來る。

私は基本練習を夏期一番強く激しく行って。秋の季節に備へるが、大概十日か二週間位は續

四百米競走



四百米決勝(第十回オリムピック)

1着 カー（米） 46秒2　　2着 イーストマン（米）46秒4
3着 ウイルソン（加） 47秒1　　4着 ウオルター（南阿）
5着 ゴールドン（米）　　6着 ゴールディング（オーストラリア）

けてやる。其の分量激しさの程度は、心身がぐた〳〵になる位に頑張る。運動場に嘔吐を吐いて伸びる位の猛烈な練習を積む。過度の激しい練習を十日も續ければ、どんな頑健な體格の所有者でも大概心身共動けなくなる程へばってしまふ。かうした狀態から直ちに休養を攝る。三日なら三日、一週間なら一週間、全然スパイクを穿かないで全く休養する。スパイクを穿きたい様な感じがした時、再び練習に着手する。此の休養で身心の英氣が十二分に養はれ、元氣が倍加し甦ってくる。

私の基本練習は獨特のもので、期間も短

いが、強さは常人より強く猛烈であるから、其の猛烈な練習に身體も精神も兎角耐へ得る準備をしておくのである。

超過距離を疾走することに據つて耐久力を養成する時、四百米より長い距離の練習をするとしても八百米の長い距離を練習する必要はない。五百米限度で充分效果が擧ると私は思ふ。

基本練習は相當に苦しいから充分これに耐へ得るだけの耐久力が必要である。五百米走つても、三百米走つてもそれは各自の自由で良いが、競技會前は、一週間に一度位の割で正式の練習を試みれば充分である。

五百米を走るのに四百米の調子で走つては、始めから終りまで完走することが出來ないから、可成走調（ペース）を落して走ることが大切である。

練習過度に對する第一の徵候は體重の激減であるから、練習後體重を計ることを忘れてはいけない。若しさうした徵候があつた場合には直ちに練習を中止すれば良い。普通の競技には過度と思はれる程度の練習は、大體本格練習期と基本練習期の中間に行ふ。

【練習過度であることを自覺した時】

私は基本練習期に、過度と思はれる程度の練習をやり、それがため心身共に疲れ、敏捷性を缺き、出發の練習に脚の動作が意の儘にならなかつたことがある。何日間もスパイクを穿かなかつた。其の時私は横濱の競技會へ行つたが、當時の私の心身の狀態としては滿足に走れさうもないので、出場を拒絶したが、あまりに奬められる儘に走つて見ると、全く意外の好いレコードが生れてしまつた。身體と心持とが全く相反する現象を現はしたのである。

第十回オリムピック大會を終へて歸京した時には、歡迎に報告に席の温まる暇もなく、勿論體の狀態を整へると謂ふことも出來ず、足馴し程度の輕い練習を二日ばかりしただけで自信もなく、出發線に就ても脚がぶる〳〵ふるへて落付かず、完走し得る自信も危かしい狀態であつたが、結果は案外好い成績を收めて自分でも一驚した經驗がある。

競技會當日は、朝早く起床する方が良い。朝早く起床する方が氣持に於ても身體の狀態に於ても良好で、食事は平常と變らぬ消化の良いものを選び、晝食は競技開始前二時間半位までに

攝る。

例へば一時から競技會が開始される時には、十時に食事を攝り、朝飯は起きて直ぐ食べる様にしなければいけない。朝早く起きないと、朝食と晝食の間が餘りにも接近することになる。

競技場へ到着してから競技までの注意としては、精神的に緊張し過ぎないことである。

今日迄の私の經驗では、トラックを見た瞬間が最も緊張の極に達するから、其の心境を變化させ早く落付かせる爲に直ぐ脫衣場へ行き着物を脫いで直ぐ準備運動に着手する準備にかゝるがよい。

競技開始前餘り早く競技場へ行つて、緊張の雰圍氣の渦中に心身をおくより、競技の始まる二十分位前に、準備運動が完了し得る時間の餘裕さへあれば良い。競技開始前一時間に競技場へ到着する様にすれば間違ひはない。

準備運動の分量は多量に、時間は、相當かけるとよいが、強い程度と思はれる位が一番適當である。殊に經驗の淺い競技者、初めて競技に參加出場する者の準備運動は、前に述べた如く強い程度でやるべきである。經驗の淺いもの、初めて出場する者の失敗の原因は、すべて準備

運動の不足に其の因を發する場合が多いことを知つて居て貰ひたい。私は強い早い出發の練習を五、六回繰り返し、距離は七十米位のを試みるが、練習して居る時の調子が出る様に、たえず身體の狀態を導いておかねばならぬ。其の調子が出たと自覺する程度に、準備運動を強くやらなければならない。所が往々にして、準備運動の過度を徒らに恐れる競技者を見掛けるが、その競技者は必ず競走後準備運動の不足を痛感するに違ひない。

準備運動として長い距離を走る必要はないが、四百米の走者は試合前に二百米を二十六秒位の速度で走つてみるとよい。これは非常に良い調子に導くものである。

季節外の練習方法としては、意の儘にのんびりと、走ることが一番良い。トラツクは冬期は雪が降つたり霜柱がたつたりして思ふ様に練習することが出來ないが、かうした練習不可能の時には、必ず身體に或運動量を與へることが必要で、其の程度の競技なら何を選んで試みても良いと思ふ。

競技の性質に依つて、陸上競技を年から年中やつて居ると、倦怠を起すから、氣分轉換の上から云つて夏などは却つて水泳をやる方が良いと云ふ人もあるが、さう迄極端に行かない方が

良い様に私は考へる。矢張り走ると云ふことを基本に於て、走るに近い似通つた筋肉を使用する競技を選定した方が良い。夫れ以外の筋肉を使用する競技は避けて貰ひたい。

四百米競走の祕訣として唯積極的に注意する點は、經濟的に力を使用し、速度のある中間疾走を型なり歩調なりを、確實に習得することで、過去の苦しい經驗から特に私は此の點を強調しておきたい。（終り）

中島亥太郎選手
競技記録とレース

1927（昭和2年）

◇第13回全国中等学校選手権大会
（9月24―25日　神宮競技場）

▼100m
①西　巖（市岡中）11秒9
②森下　貞治（沼津中）差半米
③中島亥太郎（沼津商）
④加藤　武緒（埼玉師範）
⑤細川　昌男（福島師）

極東大会代表選手として活躍したスーパー・ミドルエートの西は堅実な力走によって栄冠を占め「加賀一郎優勝盃」を獲得した。西の優勝は当然とするも記録11秒9は香しいものではなかった。2着の森下はスタートより早くも西と平行し半米の僅差で長蛇を逸したが昨年より遥かにリファインされた走法を示してくれた。新進中島が3着に入った事は括目に価した。細川もよく走った。（北沢　清）

▼200m
①西　巖（市岡中）23秒2
②森下　貞治（沼津中）差約2m
③中島亥太郎（沼津商）
④加藤　武緒（埼玉師）
⑤伏見　新助（福島師）

200m直線路にレーンがつくられ一斉にスタートした8人のスプリンターは前半100mを並走して進んだが170m位より西ぐんぐん伸びて快捷した。森下、中島は又も肩々相摩す様なレースをして2、3着に喰い込み……（北沢　清）

1928（昭和3年）

◇第1回日本学生（5月26―27日　神宮競技場）

▼200m
①相沢　巖夫（京大）22秒2
②西　巖（慶大）差3m
③中島亥太郎（早大）

▼1600mR
①京大（野間、高柳、土居、相沢）3分28秒0
②慶大（長谷川、高西、田上、岡田）
③早大（中島、能美、辻森、橋本）

早大競走部渡英選手（6月8日付朝日）
織田、南部、木村、住吉、沖田、古山の6名のオリンピック選手に、藤木、久山、山口、井沼、大沢、橋本、家永、笠原、西田の9名を加えた日本一の強チームであるが、更に尾崎、武田、渡辺、佐藤の4名を追加した。
尚、費用が許せば440ヤードに中島、ハイハードルに島、砲丸投に堀内を同行することになった。

◇第6回早慶対抗（6月9日　神宮）

▼400m
①中島亥太郎（早大）51秒2
②岡田　英夫（慶大）差胸一っ
③田上　良治（慶大）

沼津商業出身の新人中島君によって早大は400メートルの無人がやっと救われた。元気一杯の彼はあれで続くかと思われる程のスプリントで300を走り通し、そのまゝ頑張って400メートルのナンバーワン岡田君を倒してしまった。このレースとインターカレッヂの相沢君の走り振りを見て、これからの400はスプリントだという感を益々深くした。
（朝日　河合　勇）
中島スタートと共に力走してグングンと抜き、300で岡田を5m余離していたが、岡田君が頑張って大接戦となり、

抜くかと思われたが、中島ゴールに倒れ込み胸一つの差で一着となる、二、三着の差は4m。（読売）

◇早大対アキレス倶楽部陸上
（7月10日　スタンフォード・ブリッジ）
▼440ヤード
①レイ・ウッド（オックスフォード）
52秒8
②ギブソン（オ）
③**中島亥太郎**（早大）
④橋本　信義（早大）
中島は早慶の時の如く最後の直線路までリードしたがウッドに抜かれゴール前で又ギブソンに抜かる。（朝日）

◇フランス対日本学生（10月5―6日　神宮）
▼800mR
①日本学生（西、南部、村上、**中島**）
1分31抄8
②フランス

◇第10回関東学生陸上
（10月20―21日　神宮）
▼200m
①村上　国平（帝大）22抄0
②西　巖（慶大）
③南部　忠平（早大）
④**中島亥太郎**（早大）
▼400m
①**中島亥太郎**（早大）52秒8
②岡田　英夫（慶大）
③木内　清（高師）
四百米に於ける慶応の岡田君と早大の中島君の顔合せは春の早慶戦以来始めてで、中島君が再勝するか岡田くんが雪辱するかは頗る興味を以て見られたが、春以来すっかリフィックスド・コースの四百米走法を自得した中島君はその強いスプリントと共に流石の岡田君をして乗ぜしめる隙なく五十二秒八の記録で優勝した。中島君はインコース岡田君はアウトコー

スでスタートから中島君は例の通りグンと出て外側の走者を抜いてトップとなり最後のストレートで岡田君漸次その差をつめて行ったが遂に及ばなかった。中島君は現在のところ四百米の我がナンバーワンと云い得べく、いまの実力に更に猛烈なる闘志を加えるときは確実に五十秒を切り得られよう

（三浦義雄　アスレチックス　12月号）

◇第8回早大対関西学院陸上

（11月25日　上井草）

▼400m

①中島亥太郎（早大）53秒0

②倉西　胖（早大）

▼800mR

①早大（佐藤・大沢、中島、南部）1分31秒8

②関学

1929（昭和4年）

◇第7回早慶戦

（5月12日　神宮）

▼100m

①阿武（慶）11秒4②大沢（早）差1m③井沼（早）

コース順は柿原（慶）大沢、西（慶）井沼、阿武、中島

早大方中島を出したのは一寸意外であった。スタートはほとんど同時、20m辺より井沼一寸リードして居たが阿武すぐ追いつき、これを抜き、阿武の後に大沢、井沼、中島つづき、大沢、阿武に迫ったが抜けず鴻城中出身の新進阿武テープを切る、西は20m辺で脚を痛めて止む、タイム悪しきはトラックのやわらかきためか。

▼400m

①**中島亥太郎**（早大）51秒0（大会新）

②阿武　巌夫（慶大）差6m

③岡田　英夫（慶大）

コース順、中島、岡田、矢柴（早）阿武、倉西（早）高西（慶）

中島例によりスタートヘビーに出で阿武も外コースより進出して中島、阿武、岡田、矢柴の順にホームストレッチに入り、中島やゝスピードをためて居たが最後の９０メートル程を力一杯に走り阿武を引きはなし前回に自己の作ったこの大会の記録５１秒2を破る。（朝日）

◇第２回日本学生陸上

（５月２５―２６日　甲子園）

▼４００ｍ

①**中島亥太郎**（早大）５１秒２

②西　貞一（同志社）

③岡田　英夫（慶大）

▼４００ｍＲ

①早大（井沼、中島、織田、大沢）

４４秒０

②同志社　差５ｍ

③高師

▼１６００ｍＲ

①慶大　３分３５秒６

②京大

③早大（西田、矢柴、倉西、中島）

◇第９回早大対関学（７月１４日　甲子園）

▼１００ｍ

①井沼　清七（早大）　１１秒０

②**中島亥太郎**（早大）

③西田　修平（早大）

▼４００ｍ

①**中島亥太郎**（早大）

②矢柴　春雄（早大）

③倉西　胖（早大）

▼８００ｍＲ

①早大（織田、中島、西田、井沼）

１分３１秒８

◇日独対抗陸上全日本予選会

（９月７―８日　神宮）

▼２００ｍ

①**中島亥太郎**（早大）２２秒０

②阿武　巌夫（慶大）
③大沢　重憲（早大）
④西　　巌（慶大）
阿武スタート・ダッシュ素晴らしくよく、前半百メートルで中島を約一メートルリードした、中島必死に追って、百六十メートル辺で阿武を抜き約一メートルの差で一着となリ、大沢は四メートル程これに遅れた（朝日）

◇第11回関東学生
（9月28―29日　神宮）
▼200m
①西　　巌（慶大）　22秒0
②大沢　重憲（早大）
③阿武　巌夫（慶大）
④中島亥太郎（早大）
▼400m
準決勝A組
①**中島亥太郎**（早大）　50秒4
（大会新）
②木内　　清（高師）
決勝
①**中島亥太郎**（早大）　52秒2
②木内　　清（高師）
③岡田　英夫（慶大）
④倉西　　胖（早大）
（朝来風雨強し）
▼走幅跳
①富山　一郎（東大）　7m07
②**中島亥太郎**（早大）7m00
③海老名　（東大）　6m83
走幅跳も記録よく帝大の富山が一回目に七メートル〇七をだし、続いて四百ランナーの中島（早大）は七メートルを飛んで驚かし、四百メートル予選では今少しで納戸の日本記録を破る所であった。
（朝日）

◇日独対抗陸上（10月5―6日　神宮）
▼400m
①シュトルツ（独）　48秒8
②エンゲルハルト（独）
③**中島亥太郎**（日）

④木内　清（日）

中島例の如く始めよりスパートし百メートルを過ぎてよりエンゲルハルトまづ力走に移り、シュトルフも次第にスピードを加え最後の直線路に出た時は中島僅かにリードしエンゲルハルト、シュトルフ並行し木内おくれ、三百メートル辺でシュトルフ、エンゲルハルト、中島の順に胸一っを隔てゝ進み、シュトルフのラスト・スパートはエンゲルハルトを四メートル離し、中島エンゲルハルトを追って二メートルの差でゴールに入る。二着のエンゲルハルトのタイムは５０秒１、中島５０秒２。

四百メートルは実力の差であるが中島は彼の体力として負けても少しも恥かしくない奮闘振りを示した、エンゲルハルトをあれだけ追い詰めるのは現在日本では中島の他はあるまい。中島は最後の五〇メートルの力走に堪える体力が欲しい、ドイツの選手はスピードと耐久力を兼有して居る点において四百ランナーの完全な資格を備えて居た、殊にシュトルフが日本で見た事のない四〇秒台のレースの走り方を見せてくれた事はよい刺激であった（朝日）

◇第１６回日本選手権　（１１月１―３日　神宮）

▼４００ｍＲ

①稲門クラブ（井沼、中島、織田、大沢）４２秒８―日本新記録

１９３０（昭和５年）

◇第８回早慶対校陸上　（５月３日　神宮）

▼１００ｍ

①阿武　巌夫（慶大）１０秒８

②中島亥太郎（早大）

③織田　幹雄（早大）

井沼スタートよく阿武、織田これについだが五十メートルで阿武、井沼を抜き

井沼と織田やゝおくれ中島、菅沼、西は後列となって競り合う、終りに近づくや中島猛烈なスピードで井沼、織田を抜き阿武に迫ったけれども抜ききれずついに二着になる、西が六十メートル辺で足にケイレンを起して実力を発揮出来なかったのは惜しい事だった。

▼４００ｍ

①**中島亥太郎**（早大）５０秒０（日本新）

②阿武　巌夫（慶大）

③倉西　胖（早大）

（コース順　中島、阿武、倉西、高西―慶、矢柴―旱、今井―慶）

中島例の如く始めからスパートして最後の直線路に出た時は阿武より八十メートルを先んじ高西、倉西、今井並行して進み、矢柴やゝおくれた、中島は阿武を十メートル引き離し納戸が大正十四年の秋に作って以来六年間だれ一人破るものゝなかった五〇秒二の日本記録を打破した、ゴール前の倉西、高西、今井、矢柴の四人の三着争いは火の出る様で矢柴と倉西とは殆ど同着であった。

▼走幅跳

①織田　幹雄（早大）７ｍ２５

②**中島亥太郎**（早大）６ｍ７４

③黒田　保次（慶大）６ｍ５８

早大の織田は第一回に七メートル一四を飛び、第二回に七メートル二五にすゝめ、安全に一等となり、中島も第二回六メートル七四で二等となり、新人鹿内は六メートル三七でやみベストフォアから落ちた。ジャンプ順　鹿内、阪本―慶、織田、桑田―慶、中島、黒田。

▼８００ｍＲ

①早大（井沼、西田、巌田、中島）１分３１秒２

第３回日本学生陸上（５月１０―１１日　神宮）

▼４００ｍ

①中島亥太郎（早大）５０秒２

②西　貞一（同大）

③蒲田久之助（中大）５１秒６
第一コースを当てた中島はコーナーを回るとき早くも五コースの西にまで迫り三百メートル辺りで西に十米近い差を作りそのまゝゴールに入る。中島は二百米二三秒六、三百米三五秒四であった。

▼走幅跳
①織田　幹雄（早大）７ｍ２４
②大島　鎌吉（関大）７ｍ１３
③中島亥太郎（早大）６ｍ９５

▼４００ｍＲ
①早大（井沼、西田、織田、中島）
４３秒０
②文理大
③関大
早大は始めの三人の力走と巧みなバトンタッチで文理大を三米ばかりリードしたが文理大の吉岡、早大のアンカー中島を鋭くつめゴールでは僅か三分の一米にも足りない接戦であった。

▼１６００ｍＲ
①早大（中島、能美、倉西、矢柴）
３分３０秒４
②文理大　３分３１秒０
③東大
早大がトップの中島で作った差を文理大は徐々に縮め最後の木内は矢柴をゴール間際二米五〇まで追い詰めたが、矢柴よく頑張って抜かせなかった。

◇第９回極東大会
（５月２４―２７日　神宮）

▼４００ｍ
予選Ａ紐
①ホワイト（比）５０秒６（極東タイ）
②石原（日）　③蒲田（日）
Ｂ組
①中島（日）４９秒４（極東新、日本新）
②西（日）差５ｍ　③アルハンブラ（比）
第三コースの中島はスタートから素晴らしいダッシュを見せ、百米を出ずして

第五コースの中華麦国珍を抜き二百米を二十一秒台で走り、過日の早慶戦で作った五〇秒フラットを破り我競技会多年の懸案である四十秒代レコードを実現した。

▼４００m決勝

①**中島亥太郎**（日）４９秒２（日本新）
②西　貞一（日）差４m
③ホワイト（比）
④石原　孝（日）

中島は例の通りスタートから三百米近くまでダッシュした後一度情勢を利して走り更にゴール前をスパートする巧みな力の配分によって二日間連続して四十秒台の記録を作った、二着の西も中島に遅れること僅かに四米で恐らく五十秒は切っていただろうと思われる。

コースはアルハンブラ、石原、蒲田、西、中島、ホワイトの順で、中島、西ともにコースはよくなかったが例によって中島は外側のホワイトをグングン抜いて精悍なダッシュを見せ、直線路に出た時には中島をトップに、それより五米をおいて石原、ホワイト、西の順であったが西は三百からスパートしてホワイト、石原を抜き、ホワイトも石原を抜いて二、三着となる、中島が前日の予選で作った極東並に日本新記録を更に五分一秒を短縮したのは天晴れであった（朝日）

▼８００mR

①日本（佐々木吉蔵、中島、南部、古岡）１分２９秒６
②比島　差９m

（佐々木１m差で中島へ）中島一気に比島を引き離すべく力走したがネボムセノよく頑張り日比の差二米差で第三走者に渡す、南部巧みにバトンをついで素早く比島を離し五米の差で吉岡に……

▼１６００mR

①日本（石原、蒲田、西、中島）
３分２４秒２（日本新・第四走者中島の参考記録４９秒６）
②比島　３分３２秒４

石原一米先んじ蒲田にタッチ、蒲田二米先んじて西へ。西はスタートからドン

ドン出して一時比島を十五米近く離したが、最後に疲れてアランブラとの差凡そ八米で中島へ、ゴンザガ中島を追って力走したが及ばず、その差は次第に大きくなるのみ、結局三十米の差で日本チーム堂々と優勝す（朝日）

◇第4回国際学生陸上（8月7―10日）
―ドイツ・ダルムシュタット―

▼200m
①ケーニッヒ（独）　21秒5
②エルドラッヘル（独）21秒9
③**中島亥太郎**（日）　22抄0
④エンゲル（チェッコ）
⑤グレーサー（オーストリア）
⑥吉岡　隆徳（日）

予選の成績から中島（予選21抄9）に多大の期待をもたれたが中島善戦の末第三位となった。中島一コース、吉岡二コースで、中島のスタート極めてよくホームストレッチでは約一米をリードして先頭になり優勢に見えたが、最後の二十米辺でケーニッヒ、エルドラッヘルカ走してこれを抜きラストではエルドラッヘルと中島烈しい競り合いをしたが及はず惜しくも三着となった。

▼オリンピックリレー
①ドイツ　3分32秒0
②イタリア 3分32秒1
③日本　3分33秒6
④オーストリア
⑤フランス
⑥英国

西（四百）中島（二百）吉岡（二百）矢柴（八百）のオーダーで、西は最初の四百で第四位であったが、中島よく力走し一人を抜いて三位となり吉岡は更にイタリーを猛然と詰め、矢柴又懸命に駆け仏のルデュックの追撃を避けて第三位に流れ込んだ。

◇第12回関東学生陸上
（9月27―28日　神宮）

▼100m

①吉岡　隆徳（文理）１１秒１
②**中島亥太郎**（早大）
③阿部　巌夫（慶大）
④佐々木吉蔵（文理）

吉岡、中島、阿武の激しい接戦で中島レースの大半をリードしたが吉岡のラストスパートに一着を奪われた、阿武、中島の差も間一髪であった、中島がスタートの早くなったのと吉岡のスタートダッシュにすご味の薄らいだのが目につく。

▼２００ｍ
①**中島亥太郎**（早大）２１秒６
（日本タイ）
②吉岡　隆徳（文理）
③佐々木吉蔵（文理）
④阿武　巌夫（慶大）

吉岡リードし八十米辺より中島これを抜く。

１９３１（昭和６年）

◇第９回早慶陸上（５月１０日　神宮）

▼１００ｍ
①西　巌（慶大）１０秒８
②阿部　巌夫（慶大）
③**中島亥太郎**（早大）

コースは小池・Ｗ、板橋・Ｋ、中島、西、井沼・Ｗ、阿武。

スタートは阿武よかったが中島十五米頃からこれを抜き、五十米までは約一米をリード、阿武、西これに続く、五十米から西スパートして中島を抜き阿武も七十米で中島より先んじ各々半米の差でゴール（読売）

▼４００ｍ
①**中島亥太郎**（早大）４９秒８
②鵜沢　正（早大）
③張　星賢（早大）

中島スタートダッシュ物凄くぐんぐん他を抜いて二百米では既に十二三米をリード、ゴールでは約二十五米を先んじ、鵜沢、張、阿武等一団となって後を追い阿武盛んに迫ったが及はず、阿武、佐藤、今井の慶応軍何れも選に入らず早大全勝

して得点差三点にせまる（読売）

▼８００ｍＲ

①早大（井沼、高野、西田、中島）
１分２９秒８

②慶大（板橋、鈴木、阿武、西）

井沼スタートダッシュ良く忽ち板橋を押さえて次第に差を増し、第一コーナーで五米をリードそのまゝ高野へ渡す、高野又よく頑張って更に鈴木をリードして十米の差をつけ西田は十二三米先んじていたが、阿武頽勢を挽回せんと物凄くスパートして差六米にし西も中島を追い詰めゴール真近で殆ど平行しそうになったが遂に力つき中島五米半をリードしてテープを切る（読売）

これで逆転、Ｗ２９―２８ｋ

◇第４回日本学生陸上

（５月３０―３１日　甲子園）

▼１００ｍ

①吉岡　隆徳（文理）１０秒５
②佐々木吉蔵（文理）１０秒８
③西　巖（慶大）
④中島亥太郎（早大）
⑤阿武　巖夫（慶大）
⑥大島　鎌吉（関大）

▼４００ｍ

①中島亥太郎（早大）　４９秒６
②西　貞一（同志社）　５０秒６
③大木　正幹（法大）　５１秒８
④直井　忠夫（法大）
⑤小川　卓三（法大）
⑥鵜沢　正（早大）

▼４００ｍＲ

①文理大　４３秒０
②早大（井沼、高野、西田、中島）
③慶大
④同志社

◇第１１回早大対関学

（７月１２日　神宮）

▼４００ｍ

①中島亥太郎（早大）　４９秒６

②鵜沢　正（早大）

▼８００ｍＲ
①早大（小池、高野、井沢、中島）
1分３０秒６
②関学

◇第１３回関東学生陸上
（９月２６―２７日　神宮）

▼１００ｍ
①吉岡　隆徳（文理）１０秒８
②西　巖（慶大）１１秒０
③阿武　巖夫（慶大）１１秒０
④佐々木吉蔵（文理）
⑤**中島亥太郎**（早大）
⑥井沼　清七（早大）

▼２００ｍ
①**中島亥太郎**（早大）２１秒３
（日木タイ）
②吉岡　隆徳（文理）２１秒８
③阿武　巖夫（慶大）２１秒９
④佐々木吉蔵（文理）
⑤西　巖（慶大）

この日のヤマは二百米であった、吉岡中島の一騎打は予期の如く大勝負となり中島は早くも準決勝で２１秒３の日本タイ記録を以て常勝吉岡を破り、決勝はスタート後五〇メートル辺で中島、吉岡、阿武と並び、百メートルで中島早くも一メートルをリードして後半益々冴えて吉岡を寄せ付けず、再び二一秒三の日本タイ記録をもって堂々と快勝し文理大に最後の止めをさした。（この時の時計は二っが二一抄二、二っが二一秒三、風速は一メートル三〇であった）（笠原生）

▼４００ｍ
①**中島亥太郎**（早大）５０秒４
②
③張　星賢（早大）
④大木　正幹（法大）

▼走幅跳
①**中島亥太郎**（早大）６ｍ８３
②吉岡　隆徳（文理）６ｍ６６
③板橋政治郎（慶大）６ｍ６０
④湊川　捨三（早大）６ｍ５６

◇第1回一般対学生対抗陸上
（10月27日　神宮）
▼400m
①**中島亥太郎**（学生）49秒8
②西　貞一（一般）50秒0
③葛西　（一般）51秒0

◇第18回日本選手権・第6回神宮大会
（11月1―3日　神宮）
▼200m
①阿武　巌夫（慶大）22秒3
②佐々木吉蔵（文理）22秒4
③**中島亥太郎**（早大）22秒5
④祇園　（文理）

1932（昭和7年）

◇第5回日本学生（5月14―15日）
―神宮―
▼200m
①吉岡　隆徳（文理）21秒8
②佐々木吉蔵（文理）22秒0
③高野　忠幸（早大）
④中島亥太郎（早大）
⑤谷口　睦生（関大）
吉岡、中島両君の一騎打は吉岡君の回復略全きに反し、準決勝に見事な走調を示した中島君（22秒0）は決勝には痛めていた効足また痛みが増して無残に敗れた（笠原・朝日）
▼400m
①大木　正幹（法大）50抄8
②張　星賢（早大）51秒0
③三柳　将雄（文理）
④猪狩　五郎（明大）
⑤西　貞一（同大）
⑥**中島亥太郎**（早大）
▼走幅跳
①西田　修平（早大）7m01
②**中島亥太郎**（早大）6m93
③湊川　捨三（早大）6m86
④吉岡　隆徳（文理）6m85

◇第19回日本選手権
兼ロス・オリンピック最終予選
（5月28―29日　神宮）

▼200m
①阿武　巌夫（慶大）22秒3
②佐々木吉蔵（文理）22秒5
③山次　（南九州）
④**中島亥太郎**（早大）

註・故障のため400m不出場。従って代表選手としては、1600m継走―増田、大木、西、張、中島―となっていて五番目に記されている。

◇第10回国際オリンピック
ロサンゼルス大会
（7月31日―8月7日）

▼200m
第一予選D組
①**中島亥太郎**（日）22秒2
②ヘンドリックス（独）
出走二人、双方スタート良く中島始めから早く百メートルを過ぎる頃三メートルを離し悠々日本二度目のテープを切った。（最初のテープは100m予選の吉岡）

第二予選一組
①メトカーフ（米）21秒5
（オリンピック新）
②ウォルタース（南阿）
③ボルヒマイヤー（独）
④**中島亥太郎**（日）

中島スタートからよく頑張ってコーナーから直線コースに出たときには五人ほとんど平行、最後の五〇メートルを中島必死となって走ったが僅か、一メートルばかりの差でボルヒマイヤーに破れ四着となった、併し彼の走力は少しも引け目を感じさせない堂々たるレースでタイムは22秒0であった（朝日）

▼400m継走
①米国　40秒0
②ドイツ
③イタリー

④カナダ
⑤日本（吉岡隆徳、南部忠平、阿武巌夫、**中島亥太郎**）
⑥英国
日本は五コースを走り、吉岡は絶好のスタートしてリード南部に継ぐ、南部力走したが阿武、米国とドイツに抜かれ日本、イタリー、カナダ並列して中島に継ぐ、中島力走三者殆ど並んでゴールに眺込んだが僅かの差で五着となる（読売）

▼1600m継走
①米国　3分08秒2
②英国
③カナダ
④ドイツ
⑤日本（中島亥太郎、増田礒、大木正幹、西貞一）
⑥イタリー
ドイツ、カナダ、米国、日本、英国、イタリーのコース順で、中島はスタートで一寸泳いだが力走して米、英、ドイツに次いで四番、増田もよく頑張って四位を保ったが三番大木は相手のエドワード（カナダ）に抜かれ乍らよくこれに付いて走る、米国は此辺で約十米リードし、英、ドイツ、カナダの順、二米遅れて日本、ラストの西健闘してよく五着となる、六着のイタリーは日本より十五米おくれた（読売）

◇日芬陸上（9月10・13日　神宮）

▼400m
①**中島亥太郎**（オリンピック代表）
49秒0（日本新）
②張　星賢（オリンピック）
③猪狩　五郎（明大）
④増田　礒（オリンピック）
スタートは一斉に切られたが、中島は例の如くスタートダッシュ物凄く他を圧し、かつラストもよく頑張り四十九秒フラットという日本新記録で一着となった（朝日）

▼200m
①**中島亥太郎**（オリンピック）

②吉住　猛（明大）
③西　貞一（オリンピック）
④三宅　直胖（京大ＯＢ）　21秒6
コースは小原、伊吹、中島、吉住、西、三宅の順。スタートから中島よく出て百米辺では中島を先頭に約二米程遅れて吉住、西とつづいたが後半の百米では中島は更に頑張って二着の吉住に約四米の差をつくってテープを切る（朝日）

▼４００ｍ継走
①オリンピックチーム（吉岡、南部、阿武、中島）　42秒4
②選抜チーム

◇第１４回関東学生（９月２４―２５日　神宮）

▼２００ｍ
①**中島亥太郎**（早大）　21秒7
②吉岡　隆徳（文理）　22秒0
③伊吹　希三（文理）
④吉住　猛（明大）
⑤高野　忠幸（早大）
⑥鈴木　聞多（慶大）

今大会呼物の二百メートル決勝は期待に違わず吉岡、中島両雄の一騎打となった、コースは中島君が一、吉岡君が二コースで隣合せ、スタートは吉岡君例の如くよく出たが中島君も又譲らず、前半の百メートルは両者並んで紙一重の差もなかったが後半に入って中島君断然出て遂に三メートルの差で中島君凱歌を揚げた（曇天、微風なれどトラック、フイールド共に湿気多く、コンディションは良好ならず）

▼４００ｍ
①**中島亥太郎**（早大）　49秒2（日本タイ）
②張　星賢（早大）　49秒8
③大木　正幹（法大）
④窪田　博芳（早大）
⑤三柳　将雄（文理）

▼４００ｍＲ
①文理大　42秒4

②早大（小池、宮川、高野、中島）
42秒6

◇第10回早慶陸上
（10月23日　神宮）

▼100m
①**中島亥太郎**（早大）11秒2
②鈴木　聞多（慶大）11秒2
③高野　忠幸（早大）11秒3

▼400m
①**中島亥太郎**（早大）49秒0
（日本新）
②張　星賢（早大）50秒0
③窪田　博芳（早大）50秒2
コース順　中島、菅沼・K、窪田、鈴木・K、張、鍵田・K
早大の三選手あっさりリード、中島は極めて好調に他を圧し、四九秒〇の日本新記録を出して優勝、張、窪田は八米おくれて二、三着に入り慶応は鈴木ひとり頑張ったが及ばず零敗す、尚中島の記録は日芬国際競技の際とタイである（読売）

1933（昭和8年）

◇第11回早慶陸上
（5月6日　神宮）

▼100m
①鈴木　聞多（慶大）10秒8
②**中島亥太郎**（早大）11秒0
③高野　忠幸（早大）11秒1

▼400m
①**中島亥太郎**（早大）49秒4
②鈴木　聞多（慶大）50秒0
③窪田　博芳（早大）50秒6
中島君は前半を走り過ぎて後半の百メートルを向かい風で苦しんだ（朝日）

▼800mR
①早大（高野、窪田、西田、中島）
1分29秒6
②慶大

◇第6回日本学生
（5月27―28日　甲子園）

▼100m
①吉岡　隆徳（文理）　10秒6
②佐々木吉蔵（文理）　10秒7
③大島　鎌吉（関大）　11秒0
④近藤　文平（専大）
⑤中島亥太郎（早大）
⑥金子　鉄二（慶大）

▼200m
①吉岡　隆徳（文理）　21秒2
②佐々木吉蔵（文理）　21秒4
③中島亥太郎（早大）　21秒6
④鈴木　聞多（慶大）

▼400m
①中島亥太郎（早大）　50秒9
②窪田　博芳（早大）　51秒8
③菊田　冨夫（名商）　52秒2
④長谷川常次郎（文理）
⑤鈴木　聞多（慶大）
⑥張　星賢（早大）

▼400mR
①文理大43秒1
②早大（小池、西田、中島、高野）　43秒2
①慶大　43秒7

◇第2回一般対学生
（6月11日　神宮）

▼400m
①中島亥太郎（学）　49秒9
②西　貞一（一）　50秒2
③増田　礒（一）
④窪田　博芳（学）

中島と西が相当な接戦を見せて結局中島が辛うじて50秒を切って一着となったが、中島は最も荒れているインコースを走った、あのような場合インコースはあけて二コースから使うべきである、中島以外の学生選手は西と増田にあっさりやられた（読売）

◇第15回関東学生
（9月23―24日　神宮）

▼100m

①吉岡　隆徳（文理）　10秒4
②佐々木吉蔵（文理）　10秒6
③高野　忠幸（早大）　10秒7
④中島亥太郎（早大）
⑤執行　　（文理）
⑥宮川　　昇（早大）

▼200m
①吉岡　隆徳（文理）　22秒1
②佐々木吉蔵（文理）　22秒2
③鈴木　聞多（慶大）　22秒3
④中島亥太郎（早大）
⑤高野　忠幸（早大）
⑥西田　修平（早大）

▼400m
①張　　星賢（早大）　50秒0
②窪田　博芳（早大）　50秒1
③吉住　　猛（明大）　50秒3
④三柳　将雄（文理）
⑤中島亥太郎（早大）
⑥鈴木　聞多（慶大）

註――第1日の100mが終了して24日付朝日は、「肝腎の中島君疲労甚だしく残る二百、四百共に活躍の望み少なくなったので、早大、文理大の勝敗は混沌としていて定めがたい」と記した。

しかし結果は、早大147・5点、文理大105点で早大九連勝。

▼400mR
①文理大　42秒2
②早大（小池、高野、西田、中島）　42秒4

編集後記

日本陸上の４００ｍを、中距離レース走法からスプリント走法に転換、進展させたのは中島亥太郎選手です。

これは日本陸上史上、燦然と輝く快挙なのです。

この、とても近寄れない存在だった中島さんと口をきけるようになり、嬉しいことに信用も得て、中島さんの原稿を編集させていただくことになりました。

早稲田大学競走部の代表的選手の一人中島選手と、芋選手にもなれなかった私は丁度入れ違い、中島選手卒業の年、私が希望に燃えて入部したことになります。

ですがそれ迄も、東京生れの私は始終神宮競技場で、中島選手の風の如き走姿に息を詰めて魅入り、毎日、中島選手をイメージして練習していました。

ですから私のこの編集作業は、不完全燃焼に終わった私の青春の記念でもあり、お委せいただいて光栄至極なのです。

中島さんが秘蔵されていたレースの写真は全部、戦災で失ってしまわれたので、中島さんの親友・西田修平氏が預かられた、早稲田競走部の全盛時代を実現された名部長・山本忠興先生所蔵の写真と、陸上競技の写真を撮り続けてこられてた遠藤連之助氏ご所持のものを載せさせていただきました。両氏に感謝いたします。

ところが編集が略完了の時点で、この上なき朗報が飛込みました。

往年の名ハードラーで、現在、ベースボール・マガジン社編集企画局々長の田中順氏が、陸上競技マガジンの蔵書庫に、中島さんが早大時代に書いた著作があるよ、とアドバイスして下さいました。それは昭和九年三省堂発行、日本陸上競技聯盟編、陸上競技競走篇の中で、中島さんが担当した「四百米競走」でした。

欣喜雀躍して、コピーし掲載することにしました。順さんほんとに有難う。

でも、こんな立派な指導書があるのに一言も言い出さない中島さんの淡泊、その走姿そのままの切れの良すぎる性格に感嘆すると共に、早高一年の私が私淑する氏の本に何故気付かなかったかにも呆れます。

私に、中島先輩を称えた拙文があります。本書の片隅に記させていただきました。

（戸田　純）

トラックに虹をかける男―

「嫌いだったんだよ、いやだね４００は。走るたんびに反吐をはいて……織田さんが走れ！と言ったのがいけなかったんだ。すべて昔のこったよ、むかしの……いやだね四百は……」

この罰当りな言葉を吐いてくれたのが、わが国４００ｍの代表的ランナーだった中島亥太郎さん。

罰当たりと云ったが、記録より何より、あの目の醒めるような、いや眼の眩むようなロング・スプリントの冴えといったらなかった。腕の振りがまたキラキラで、ボクら陸上少年の細胞の一っ一っに染み込んでしまって……今に至る迄、こんな美しいキレイなフォームのランナーを知らない。

その先輩が「四百は嫌いだ」そりゃ先輩ちょっとどころか、てんでまったく「きこえませんよ」と、言いたくなる。

第一、ボクたちの兄貴くらいの年頃で、兄貴が弟を引っ張るようにボク達を陸上の虜にしてしまった、その責任を亥太郎さんどうしてくれるんです、と言いたい。

ほんとに、あの、トラックに虹が掛るような、流れるような、ロング・スプリントよ！なのである。

あなたはガラス細工の競走犬

朝のようなロング・スプリントの感
触

あなたに感じるいささかの贅肉
それはいまだに四百メートル日本記
録保持者であること

昭和26年頃、ボクはこんな詩をつくった。昭和8年に亥太郎選手が創った49秒0がまだそのまゝ日本記録として残っていた。

49秒0は昭和9年、今井慶二(京都一商)がタイ記録、昭和29年、赤木完次(中大)が48秒5と、記録を縮めた。

実に21年間、亥太郎さんの記録は輝き続け、早大競走部黄金時代を象徴する記録の一つでもあった。亥太郎さんは400mの日本記録を6回更新し、200mでも2度日本新を出した。

透明なスプリントを青葉の風で融かして造型したような風貌、プロポーション、おかっぱ頭、早稲田には珍しいモダンボーイであった。

(「ランナーズ」昭和55年12月号)

―スプリント随筆―

昔々の駈けっこの物語

平成４年10月１日 発行
著者　中島亥太郎
　　藤沢市鵠沼海岸３−１２−２３

写真印刷・製本
　　東京都台東区寿２−６−４
　　有限会社　奥村栄進堂

―限定　１００部―

無断転載を禁ず　　―非売品―